

統一的な基準による財務書類

令和3年度決算分

南陽市財政課

- 1 統一的な基準による財務書類 P1～P9
(一般・全体・連結 財務書類三表)
- 2 統一的な基準による財務書類説明資料 P10～P29
- 3 南陽市の財務書類(分析編) P30～P44

一般会計等貸借対照表

(令和 4年 3月31日現在)

(単位:円)

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	41,493,077,005	固定負債	16,267,400,465
有形固定資産	38,960,354,892	地方債	14,107,947,465
事業用資産	21,589,276,432	長期未払金	0
土地	8,917,439,652	退職手当引当金	2,159,453,000
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	29,844,922,568	その他	0
建物減価償却累計額	-17,296,802,941	流動負債	1,675,444,826
工作物	255,251,432	1年内償還予定地方債	1,356,557,578
工作物減価償却累計額	-131,534,279	未払金	1,100
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	294,996,322
航空機	0	預り金	23,889,826
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0		
その他減価償却累計額	0	負債合計	17,942,845,291
建設仮勘定	0		
インフラ資産	17,151,369,717	【純資産の部】	
土地	3,553,474,055	固定資産等形成分	42,142,074,275
建物	65,520,000	余剰分(不足分)	-16,636,641,125
建物減価償却累計額	-34,706,698		
工作物	30,281,173,717		
工作物減価償却累計額	-16,714,091,357		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	0		
物品	1,257,416,960		
物品減価償却累計額	-1,037,708,217		
無形固定資産	16,416,000		
ソフトウェア	16,416,000		
その他	0		
投資その他の資産	2,516,306,113		
投資及び出資金	266,793,812		
有価証券	55,104,512		
出資金	211,689,300		
その他	0		
投資損失引当金	0		
長期延滞債権	70,344,331		
長期貸付金	17,221,488		
基金	2,171,514,224		
減債基金	101,677,063		
その他	2,069,837,161		
その他	0		
徴収不能引当金	-9,567,742		
流動資産	1,955,201,436		
現金預金	1,221,914,236		
未収金	21,773,709		
短期貸付金	0		
基金	711,520,859		
財政調整基金	702,223,859		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	0		
その他	0		
徴収不能引当金	-7,368		
資産合計	43,448,278,441	純資産合計	25,505,433,150
		負債及び純資産合計	43,448,278,441

一般会計等行政コスト及び純資産変動計算書

自 令和 3年 4月 1日
至 令和 4年 3月31日

(単位:円)

科目	金額	金額	
経常費用	15,749,536,614		
業務費用	7,745,491,738		
人件費	2,588,892,590		
職員給与費	1,766,353,019		
賞与等引当金繰入額	294,996,322		
退職手当引当金繰入額	161,175,983		
その他	366,367,266		
物件費等	4,937,710,764		
物件費	3,320,699,531		
維持補修費	159,822,852		
減価償却費	1,457,188,381		
その他	0		
その他の業務費用	218,888,384		
支払利息	92,263,613		
徴収不能引当金繰入額	16,889,533		
その他	109,735,238		
移転費用	8,004,044,876		
補助金等	3,614,151,307		
社会保障給付	2,747,569,690		
他会計への繰出金	1,609,629,375		
その他	32,694,504		
経常収益	376,867,027		
使用料及び手数料	101,586,065		
その他	275,280,962		
純経常行政コスト	15,372,669,587		
臨時損失	1,475,457,312		
災害復旧事業費	155,341,128		
資産除売却損	1,320,116,184		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	0		
臨時利益	0		
資産売却益	0		
その他	0		
純行政コスト	16,848,126,899		16,848,126,899
財源	15,431,563,270		15,431,563,270
税金等	10,364,093,450		10,364,093,450
国県等補助金	5,067,469,820		5,067,469,820
本年度差額	-1,416,563,629		-1,416,563,629
固定資産等の変動(内部変動)		-1,605,735,002	1,605,735,002
有形固定資産等の増加		1,236,821,224	-1,236,821,224
有形固定資産等の減少		-2,784,878,010	2,784,878,010
貸付金・基金等の増加		1,234,139,190	-1,234,139,190
貸付金・基金等の減少		-1,291,817,406	1,291,817,406
資産評価差額	-91,908	-91,908	
無償所管換等	1,179,506	1,179,506	
その他	27,958,057	26,058,057	1,900,000
本年度純資産変動額	-1,387,517,974	-1,578,589,347	191,071,373
前年度末純資産残高	26,892,951,124	43,720,663,622	-16,827,712,498
本年度末純資産残高	25,505,433,150	42,142,074,275	-16,636,641,125

【様式第4号】

一般会計等資金収支計算書

自 令和 3年 4月 1日

至 令和 4年 3月31日

(単位:円)

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	14,322,669,368
業務費用支出	6,318,624,492
人件費支出	2,636,104,358
物件費等支出	3,480,522,383
支払利息支出	92,263,613
その他の支出	109,734,138
移転費用支出	8,004,044,876
補助金等支出	3,614,151,307
社会保障給付支出	2,747,569,690
他会計への繰出支出	1,609,629,375
その他の支出	32,694,504
業務収入	15,368,920,864
税込等収入	10,367,670,006
国県等補助金収入	4,624,201,014
使用料及び手数料収入	101,558,665
その他の収入	275,491,179
臨時支出	155,341,128
災害復旧事業費支出	155,341,128
その他の支出	0
臨時収入	0
業務活動収支	890,910,368
【投資活動収支】	
投資活動支出	2,470,960,414
公共施設等整備費支出	1,236,821,224
基金積立金支出	1,192,939,190
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,200,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,581,659,658
国県等補助金収入	443,268,806
基金取崩収入	1,087,435,647
貸付金元金回収収入	43,381,760
資産売却収入	7,573,445
その他の収入	0
投資活動収支	-889,300,756
【財務活動収支】	
財務活動支出	1,287,045,900
地方債償還支出	1,287,045,900
その他の支出	0
財務活動収入	1,662,600,000
地方債発行収入	1,662,600,000
その他の収入	0
財務活動収支	375,554,100
本年度資金収支額	377,163,712
前年度末資金残高	820,860,698
本年度末資金残高	1,198,024,410
前年度末歳計外現金残高	19,336,050
本年度歳計外現金増減額	4,553,776
本年度末歳計外現金残高	23,889,826
本年度末現金預金残高	1,221,914,236

全体貸借対照表

(令和 4年 3月31日現在)

(単位:円)

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	63,518,334,404	固定負債	31,097,182,207
有形固定資産	59,104,164,327	地方債	21,695,377,195
事業用資産	21,589,276,433	長期未払金	0
土地	8,917,439,652	退職手当引当金	2,461,776,420
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	29,846,192,718	その他	6,940,028,592
建物減価償却累計額	-17,298,073,090	流動負債	2,650,899,374
工作物	255,251,432	1年内償還予定地方債	2,163,220,333
工作物減価償却累計額	-131,534,279	未払金	131,178,607
船舶	0	未払費用	0
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	321,460,010
航空機	0	預り金	35,040,424
航空機減価償却累計額	0	その他	0
その他	0		
その他減価償却累計額	0	負債合計	33,748,081,581
建設仮勘定	0		
インフラ資産	37,146,564,690	【純資産の部】	
土地	3,810,812,673	固定資産等形成分	64,102,268,739
建物	640,593,593	余剰分(不足分)	-30,899,810,256
建物減価償却累計額	-345,673,879		
工作物	60,926,833,022		
工作物減価償却累計額	-28,101,884,582		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	215,883,863		
物品	1,944,008,020		
物品減価償却累計額	-1,575,684,816		
無形固定資産	970,598,296		
ソフトウェア	970,091,749		
その他	506,547		
投資その他の資産	3,443,571,781		
投資及び出資金	270,132,812		
有価証券	55,104,512		
出資金	215,028,300		
その他	0		
投資損失引当金	0		
長期延滞債権	155,692,335		
長期貸付金	17,221,488		
基金	3,023,421,521		
減債基金	101,677,063		
その他	2,921,744,458		
その他	84,780		
徴収不能引当金	-22,981,155		
流動資産	3,432,205,660		
現金預金	2,572,872,633		
未収金	165,259,805		
短期貸付金	0		
基金	711,520,859		
財政調整基金	702,223,859		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	14,461,717		
その他	1,584,000		
徴収不能引当金	-33,493,354		
資産合計	66,950,540,064	純資産合計	33,202,458,483
		負債及び純資産合計	66,950,540,064

全体行政コスト及び純資産変動計算書

自 令和 3年 4月 1日
至 令和 4年 3月31日

(単位:円)

科目	金額	金額	
経常費用	22,755,841,288		
業務費用	9,652,005,927		
人件費	2,848,794,393		
職員給与費	1,968,301,230		
賞与等引当金繰入額	321,460,010		
退職手当引当金繰入額	168,834,387		
その他	390,198,766		
物件費等	6,276,712,652		
物件費	3,876,465,554		
維持補修費	192,298,633		
減価償却費	2,207,948,465		
その他	0		
その他の業務費用	526,498,882		
支払利息	220,081,303		
徴収不能引当金繰入額	52,381,966		
その他	254,035,613		
移転費用	13,103,835,361		
補助金等	3,803,504,063		
社会保障給付	9,267,602,594		
他会計への繰出金	0		
その他	32,728,704		
経常収益	1,552,877,195		
使用料及び手数料	1,186,024,755		
その他	366,852,440		
純経常行政コスト	21,202,964,093		
臨時損失	1,490,090,759		
災害復旧事業費	155,341,128		
資産除売却損	1,334,269,220		
投資損失引当金繰入額	0		
損失補償等引当金繰入額	0		
その他	480,411		
臨時利益	3,547,159		
資産売却益	0		
その他	3,547,159		
純行政コスト	22,689,507,693		
財源	21,477,929,056		
税収等	12,659,133,852		
国県等補助金	8,818,795,204		
本年度差額	-1,211,578,637		
固定資産等の変動(内部変動)			
有形固定資産等の増加		-1,734,908,983	1,734,908,983
有形固定資産等の減少		1,737,933,385	-1,737,933,385
貸付金・基金等の増加		-3,549,791,130	3,549,791,130
貸付金・基金等の減少		1,368,766,168	-1,368,766,168
資産評価差額	-91,908	-1,291,817,406	1,291,817,406
無償所管換等	8,029,158	-91,908	
その他	27,608,057	8,029,158	
その他		25,708,057	1,900,000
本年度純資産変動額	-1,176,033,330	-1,701,263,676	525,230,346
前年度末純資産残高	34,378,491,813	65,803,532,415	-31,425,040,602
本年度末純資産残高	33,202,458,483	64,102,268,739	-30,899,810,256

【様式第4号】

全体資金収支計算書

自 令和 3年 4月 1日

至 令和 4年 3月31日

(単位:円)

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	20,276,127,032
業務費用支出	7,409,757,337
人件費支出	2,888,528,825
物件費等支出	4,047,198,146
支払利息支出	220,081,303
その他の支出	253,949,063
移転費用支出	12,866,369,695
補助金等支出	3,566,038,397
社会保障給付支出	9,267,602,594
他会計への繰出支出	0
その他の支出	32,728,704
業務収入	22,382,770,788
税込等収入	12,654,073,736
国県等補助金収入	8,202,127,675
使用料及び手数料収入	1,159,516,720
その他の収入	367,052,657
臨時支出	155,821,539
災害復旧事業費支出	155,341,128
その他の支出	480,411
臨時収入	3,547,159
業務活動収支	1,954,369,376
【投資活動収支】	
投資活動支出	3,086,094,003
公共施設等整備費支出	1,717,327,835
基金積立金支出	1,327,216,168
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,550,000
その他の支出	0
投資活動収入	1,662,163,658
国県等補助金収入	523,772,806
基金取崩収入	1,087,435,647
貸付金元金回収収入	43,381,760
資産売却収入	7,573,445
その他の収入	0
投資活動収支	-1,423,930,345
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,089,690,044
地方債償還支出	2,089,690,044
その他の支出	0
財務活動収入	1,957,000,000
地方債発行収入	1,957,000,000
その他の収入	0
財務活動収支	-132,690,044
本年度資金収支額	397,748,987
前年度末資金残高	2,151,233,820
本年度末資金残高	2,548,982,807
前年度末歳計外現金残高	19,336,050
本年度歳計外現金増減額	4,553,776
本年度末歳計外現金残高	23,889,826
本年度末現金預金残高	2,572,872,633

連結貸借対照表

(令和 4年 3月31日現在)

(単位:円)

科目	金額	科目	金額
【資産の部】		【負債の部】	
固定資産	68,828,328,834	固定負債	33,907,720,235
有形固定資産	63,991,595,094	地方債等	23,980,605,217
事業用資産	25,536,499,377	長期未払金	0
土地	9,629,578,320	退職手当引当金	2,856,116,947
立木竹	0	損失補償等引当金	0
建物	34,484,795,780	その他	7,070,998,071
建物減価償却累計額	-19,928,689,468	流動負債	3,073,436,363
工作物	1,393,188,784	1年内償還予定地方債等	2,433,986,626
工作物減価償却累計額	-531,781,036	未払金	217,665,315
船舶	0	未払費用	854,847
船舶減価償却累計額	0	前受金	0
浮標等	0	前受収益	0
浮標等減価償却累計額	0	賞与等引当金	384,345,547
航空機	0	預り金	35,330,123
航空機減価償却累計額	0	その他	1,253,905
その他	0	負債合計	36,981,156,598
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	489,406,997	【純資産の部】	
インフラ資産	37,150,648,144	固定資産等形成分	69,401,995,643
土地	3,810,812,673	余剰分(不足分)	-33,732,834,644
建物	640,593,593	他団体出資等分	0
建物減価償却累計額	-345,673,879		
工作物	60,945,564,462		
工作物減価償却累計額	-28,116,532,568		
その他	0		
その他減価償却累計額	0		
建設仮勘定	215,883,863		
物品	7,439,843,101		
物品減価償却累計額	-6,135,395,528		
無形固定資産	972,657,840		
ソフトウェア	971,946,923		
その他	710,917		
投資その他の資産	3,864,075,899		
投資及び出資金	265,144,612		
有価証券	55,104,512		
出資金	210,028,300		
その他	11,800		
長期延滞債権	155,744,405		
長期貸付金	22,505,787		
基金	3,443,577,651		
減債基金	101,677,063		
その他	3,341,900,588		
その他	84,781		
徴収不能引当金	-22,981,337		
流動資産	3,821,988,764		
現金預金	2,812,637,239		
未収金	312,480,505		
短期貸付金	0		
基金	711,520,859		
財政調整基金	702,223,859		
減債基金	9,297,000		
棚卸資産	20,590,375		
その他	1,663,829		
徴収不能引当金	-36,904,043		
繰延資産	0		
資産合計	72,650,317,597	純資産合計	35,669,160,999
		負債及び純資産合計	72,650,317,597

連結行政コスト及び純資産変動計算書

自 令和 3年 4月 1日

至 令和 4年 3月31日

(単位:円)

科目	金額	金額		
経常費用	23,892,096,501			
業務費用	11,828,400,564			
人件費	3,823,136,367			
職員給与費	2,835,404,884			
賞与等引当金繰入額	384,345,547			
退職手当引当金繰入額	212,250,441			
その他	391,135,495			
物件費等	7,423,661,691			
物件費	4,657,904,445			
維持補修費	341,609,045			
減価償却費	2,424,144,391			
その他	3,810			
その他の業務費用	581,602,506			
支払利息	234,504,901			
徴収不能引当金繰入額	55,791,682			
その他	291,305,923			
移転費用	12,063,695,937			
補助金等	2,762,214,038			
社会保障給付	9,267,608,540			
その他	33,873,359			
経常収益	2,649,569,312			
使用料及び手数料	2,221,700,219			
その他	427,869,093			
純経常行政コスト	21,242,527,189			
臨時損失	1,507,667,078			
災害復旧事業費	155,341,128			
資産除売却損	1,342,089,109			
損失補償等引当金繰入額	0			
その他	10,236,841			
臨時利益	29,109,428			
資産売却益	837,614			
その他	28,271,814			
純行政コスト	22,721,084,839		22,721,084,839	
財源	21,942,971,847		21,942,971,847	
税収等	13,068,724,292		13,068,724,292	
国県等補助金	8,874,247,555		8,874,247,555	
本年度差額	-778,112,992		-778,112,992	0
固定資産等の変動(内部変動)		-1,384,127,107	1,384,127,107	
有形固定資産等の増加		2,349,507,566	-2,349,507,566	
有形固定資産等の減少		-3,773,806,947	3,773,806,947	
貸付金・基金等の増加		1,400,115,856	-1,400,115,856	
貸付金・基金等の減少		-1,359,943,582	1,359,943,582	
資産評価差額	-91,908	-91,908		
無償所管換等	8,029,158	8,029,158		
他団体出資等分の増加	0			0
他団体出資等分の減少	0			0
比例連結割合変更に伴う差額	971,976,912	0	971,976,912	
その他	35,455,520	1,647,972,078	-1,612,516,558	
本年度純資産変動額	237,256,690	271,782,221	-34,525,531	0
前年度末純資産残高	35,431,904,309	69,130,213,422	-33,698,309,113	0
本年度末純資産残高	35,669,160,999	69,401,995,643	-33,732,834,644	0

【様式第4号】

連結資金収支計算書

自 令和 3年 4月 1日

至 令和 4年 3月31日

(単位:円)

科目	金額
【業務活動収支】	
業務支出	21,193,647,410
業務費用支出	9,367,417,139
人件費支出	3,846,315,541
物件費等支出	4,995,292,287
支払利息支出	234,589,938
その他の支出	291,219,373
移転費用支出	11,826,230,271
補助金等支出	2,524,748,372
社会保障給付支出	9,267,608,540
その他の支出	33,873,359
業務収入	23,927,405,774
税込等収入	13,029,821,294
国県等補助金収入	8,253,662,866
使用料及び手数料収入	2,225,278,844
その他の収入	418,642,770
臨時支出	165,577,969
災害復旧事業費支出	155,341,128
その他の支出	10,236,841
臨時収入	28,271,814
業務活動収支	2,596,452,209
【投資活動収支】	
投資活動支出	3,728,863,579
公共施設等整備費支出	2,328,902,016
基金積立金支出	1,358,308,963
投資及び出資金支出	0
貸付金支出	41,652,600
その他の支出	0
投資活動収入	1,798,803,009
国県等補助金収入	591,530,461
基金取崩収入	1,155,263,128
貸付金元金回収収入	43,598,360
資産売却収入	8,411,060
その他の収入	0
投資活動収支	-1,930,060,570
【財務活動収支】	
財務活動支出	2,547,636,300
地方債等償還支出	2,541,807,765
その他の支出	5,828,535
財務活動収入	2,366,781,680
地方債等発行収入	2,366,781,680
その他の収入	0
財務活動収支	-180,854,620
本年度資金収支額	485,537,019
前年度末資金残高	2,292,759,957
比例連結割合変更に伴う差額	10,328,981
本年度末資金残高	2,788,625,958
前年度末歳計外現金残高	19,490,500
本年度歳計外現金増減額	4,520,781
本年度末歳計外現金残高	24,011,281
本年度末現金預金残高	2,812,637,239

令和3年度

南陽市

統一的な基準による財務書類

説明資料

令和5年2月

落合公認会計士事務所

目 次

I 令和3年度 南陽市財務書類の公表について

II 地方公会計制度について

- (1) 固定資産台帳と財務書類の作成の必要性
- (2) 地方自治体における地方債の特徴
- (3) 企業会計手法の導入
- (4) 財務書類とは？
- (5) 統一的な基準の活用方法
- (6) 日々仕訳とは？
- (7) 財務書類の作成ツール

III 令和3年度 財務書類（要約）

- (1) 貸借対照表〔バランスシート〕
- (2) 行政コスト計算書及び純資産変動計算書
- (3) 資金収支計算書
- (4) 相関図

IV 比率

V 財務書類分析からわかること

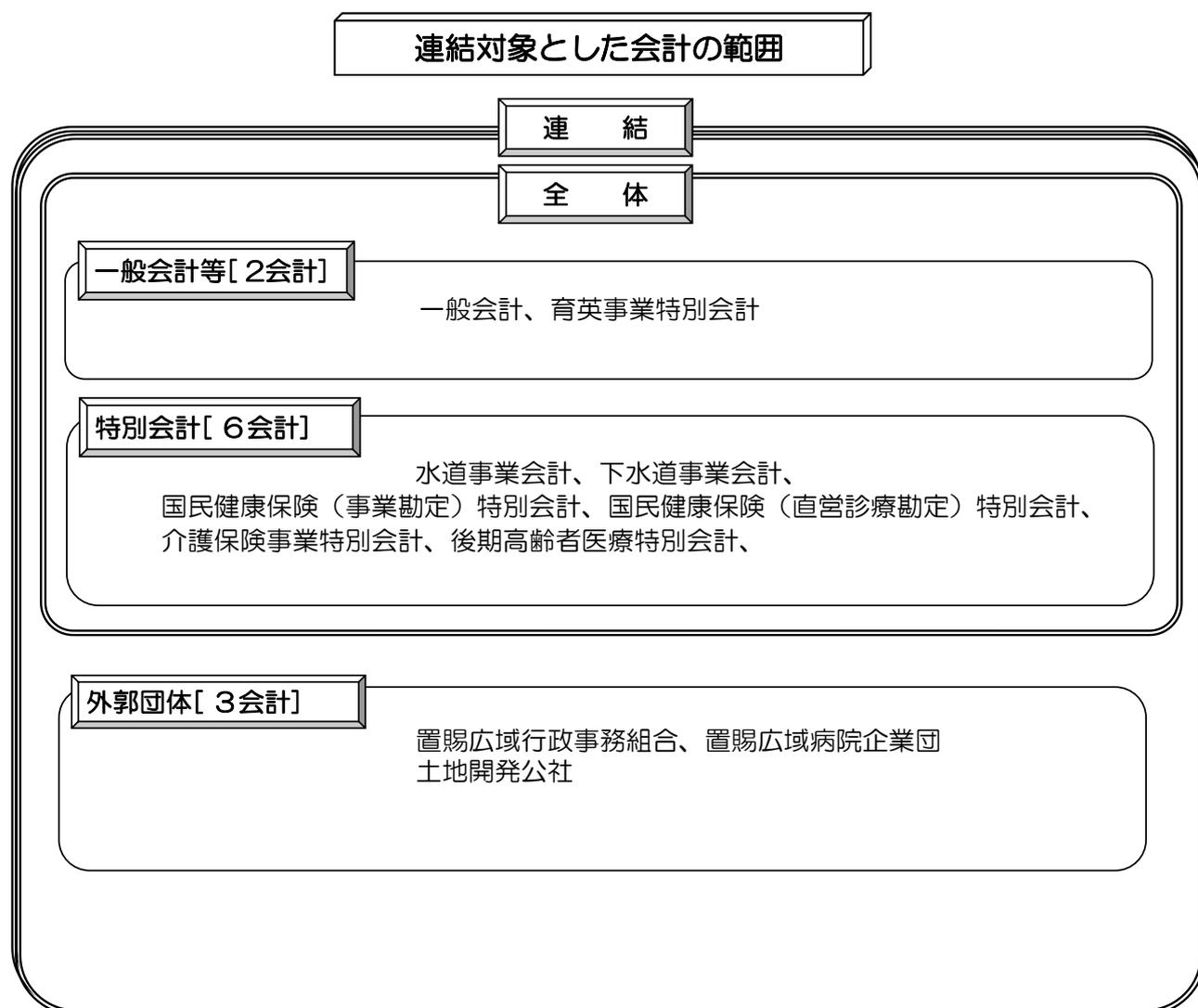
- (1) 比較分析のための前提条件
- (2) 貸借対照表から見える将来の負担
- (3) 実質債務（地方債等と現金預金）の状況
- (4) 純資産変動計算書の「本年度差額」の状況
- (5) 純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況
- (6) 資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支の状況
- (7) 歳入歳出決算書の経年データ

I 令和3年度 南陽市財務書類の公表について

平成18年6月に成立した「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」を契機に、地方の資産・債務改革の一環として「新地方公会計制度の整備」が位置づけられました。これにより「新地方公会計制度研究会報告書」で示された「基準モデル」又は「総務省方式改訂モデル」を活用して、地方公共団体単体及び関連団体等を含む連結ベースでの財務書類を人口3万人以上の都市においては、平成21年度までに整備し公表するよう通知されました。

こうした状況を踏まえ、本市では平成20年度から「基準モデル」により資産台帳の整備に着手し、複式簿記に基づき発生主義による財務書類を作成することにより、本市が所有する全ての資産と負債状況や行政サービスに要したコストを把握してまいりました。

しかし、平成26年4月30日に財務書類の作成方法の統一化のための「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書」が取りまとめられ、平成27年1月23日に「統一的な基準による地方公会計マニュアル」が取りまとめられました。本市では平成27年度から「統一的な基準」により財務書類を作成することにしました。これにより団体間の比較可能性が確保され、将来的には決算分析や予算編成への活用を考えています。



※ 全体とは、一般会計等に特別会計を含めたもので、連結とは、全体に外郭団体を含めたものです。

なお、外郭団体のうち第三セクターについては、市の出資比率が50%以上の団体を対象としています。

II 地方公会計制度について

1. 固定資産台帳と財務書類の作成の必要性

- ① 税収も地方債も同じ財源だが、返済義務の有無で相違するので、地方債に依存すると債務肥大化する。
- ② 債務が肥大化した理由の一つは、財源に借金を含めて、財政運営をしてきたためである。
- ③ 財政改善のための歳入増、歳出減は難しく、資産債務改革が必要となり、資産に手を付けることになった。
- ④ 地方交付税算定のための公有財産台帳並びに各種法定台帳の作成(数量管理)から、有効活用のための固定資産台帳(金額管理)の作成。
- ⑤ 厳しい財政事情のもと、財政の透明性、効率化、適正化が求められ、企業会計手法を活用した財務書類の開示も求められた。

2. 地方自治体における地方債の特徴

固定資産形成に充てるための地方債には、次の魅力がある。

- ① 財政運営上、借金は、現役世代と将来世代をつなぐ世代間公平性を確保するための、重要な架け橋である。
- ② 予算編成上、後日交付税措置される借金は、借金した方が得なので、税収・補助金収入と同様に、重要な財源である。

3. 企業会計手法の導入

(1) 官庁会計に収支の概念を導入した

- ① 予算の適正・確実な執行においては、歳入と歳出は一致しなければならない。
- ② 財政状態を診断するためには、歳入から歳出を差し引いた収支の概念が必要となる。

(2) 導入例

- ① 貸借対照表の純資産
- ② 資金収支計算書の基礎的財政収支(借金に依存しなかった場合の収支)
 - (あ) 基礎的財政収支とは、計算上は、歳入から繰越金と公債発行を、歳出から公債費を、除外した収支。
 - (い) 借金を財源とした結果、債務が肥大化したので、借金に依存しなかった場合の収支を把握する。

4. 財務書類とは？

(1) 総務省の財務書類に対する考え方

- ① 財務書類の作成指針として、「民間の利益目的」でなく、「財政の三つの役割」を基礎にしている。
- ② 「財政の三つの役割」には、「資源配分機能」、「所得再配分機能」および「経済調整機能」。
- ③ 「資源配分機能」は、現役世代に対する資源配分と、将来世代に対する資源配分がある。

(2) 財務書類とは、自治体の「立ち位置」・「身の丈」を表す書類で、健康診断書でもあり、4表又は3表から構成される。

種類	数値の内容	収支尻概念の導入	情報内容
貸借対照表	発生主義データを含み、 年度末時点の財政状態を示す	純資産	年度末の財政状態 を示す(ストック情報)
行政コスト計算書	減価償却費等の発生主義データを含む 現役世代に対する資源配分の内訳を示す	純行政コスト	1年間の運営状況 を示す(フロー情報)
純資産変動計算書	現役世代に対する資源配分の合計額と将来世代に対する資源配分 の増減額、並びに税収等財源を対比させ運営状況を示す	本年度差額	
資金収支計算書	現金主義により、 資金収支による運営状況を示す	基礎的財政収支	

(3) 3表様式の長所

- ① 現役世代と将来世代に対する資源配分の状況の各内訳が、一つの表に集約されたので、議員、住民に対する説明が、しやすくなった。
- ② 行政コスト計算書と純資産変動計算書を結合させた書類が、民間企業の損益計算書に相当するので、理解しやすい。

(4) 連結決算とは？

- ① 全体会計＝親＋子 ＝一般会計等決算＋公営事業会計
連結決算＝親＋子＋親戚＝一般会計等決算＋公営事業会計＋外郭団体(一組・広域＋関係団体)
- ② 連結決算の必要性
・親・子・親戚間で、「繰出金」、「負担金・補助金」、「委託費」を支出しており、資金関係が密接なため、相殺表示が必要である。

(5) 発生主義決算とは？

- ① ・歳入・歳出決算数値に、「見えないおカネ」を加えて決算すること。
・「見えないおカネ」とは、将来、資金の流入が見込まれる事象に係る数値で、「発生主義数値」ともいう。
- ② 発生主義数値の例
・将来、資金の出し入れを伴い、債権債務の確定したもの……………収入未済額、リース債務等
・現在、債権・債務は確定していないが、確定に準じたもの……………賞与引当金、退職手当引当金等
・現時点の保有する資産の価値の増減を推定する項目……………減価償却費、不納欠損額、評価損益等

5. 統一的な基準の活用方法

(1) 固定資産データの活用

毎年の「維持費」に「減価償却費」を加えてフルコストによる「事業別または施設別収支」を作成すること。

- ① 施設の更新、統廃合について、リストアップして議論する段階で、数値情報を提供する。
- ② フルコストによる受益者負担割合算定のための数値情報、及び一人あたりコスト情報を提供する。
- ③ 民間の資金・ノウハウを活用したPPP/PFIの導入のために、固定資産データの公表が期待される。

(2) 財務書類の活用

年1回作成される財務書類は、自治体の「健康診断書」である。

- ① 誰が活用するのか……財政経営者つまり首長から財政までのラインで特に「財政課長」である。
- ② 活用とは？……経年比較、他団体比較を通じて、自分の役所の状況を読み取り、今後活かすことである。
住民並びに住民の代表から質問があった場合、「財政課長が読み取ったことを、首長まで共有し、今後活かしているの、活用されている。」

6. 日々仕訳とは？

(1) 目的により簿記の方法が異なる。

- ① 予算の適正・確実な執行のためには、「複式簿記」より「単式簿記」が優れている。
- ② 財務書類を作成する場合、「見えないお金」も含むために、数値の正確性を担保するためには、「複式簿記」が必要。

(2) 複式簿記の記帳のタイミング

- ① 「日々仕訳」が望ましいとされているが、そのためには全庁的に知識が必要。
- ② 金銭の入出金程度の記帳ならまだしも、日常業務に加えて複式簿記の習得など、民間ではあり得ない。
- ③ 事務負担や経費負担を考えて、「今後の新地方公会計の推進に関する研究会報告書（平成26年4月総務省）294項」に記載された「期末一括仕訳方式」により作成する。

7. 財務書類の作成ツール

- ① 「財務書類作成要領29段落」による集計値を使用する方法によれば、仕訳変換処理で特定できる場合の仕訳件数は、概ね節の科目数（歳入16・歳出28）程度の仕訳で済むので、表計算ソフトでの対応が可能となり、検証もしやすい。
- ② 当事務所の財務書類作成ソフトは、平成27年11月27日に特許権を取得した。

(参考)

(イ) 統一的な基準で求められる固定資産台帳の基準モデル団体への取り扱い

- ① 固定資産マニュアルによれば、「既に固定資産台帳が基準モデル等に基づいて評価されている資産について、合理的かつ客観的な基準によって評価されたものであれば、引き続き、当該評価額によることを許容する」と記載し、二重負担を回避している。
- ② 道路、河川及び水路の敷地については、統一的な基準では、一定の場合1円評価としており、基準モデル評価を継続する場合、基準が異なることによる評価誤差が大きくなるので注記が求められる。

(ロ) 統一的な基準で求められる複式簿記の方法

(1) 財務書類作成の概略

- ① すべての資金取引について「仕訳変換」を行い、かつ、すべての非資金取引について「仕訳処理」を行い、仕訳帳に記載する。
- ② 仕訳帳が完成したら、会計ソフト、表計算ソフト等により集計し、総勘定元帳並びに試算表に転記し、財務書類が完成。

(2) 仕訳帳への記載の仕方

- ① 単式簿記により記帳された歳入歳出データは、「仕訳変換処理」により、仕訳帳に記載する。
 - (a) 予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できる」場合
 - ・工事請負費・公有財産購入費・委託費等の固定資産に関係する予算科目を除くと、その多くの予算科目は、行政コストに計上されるものと資産に計上されるものとに、特定されている。
 - ・特定された予算科目は、統一的な基準の地方公会計マニュアル資金仕訳変換表「別表6-1:6-2」に従い、仕訳変換処理する。
 - ・仕訳変換処理の設定をしておけば仕訳集計が、自動計算されるので、簿記の知識の有無は重要ではない。
 - (b) 予算科目から、統一的な基準の勘定科目を「特定できない」場合
 - ・「特定できない」場合とは、工事請負費等の固定資産に関係する予算科目の場合であり、個別伝票毎に、その歳入歳出について、行政コストなのか資産形成なのか、科目及び金額を特定する必要がある。
 - ・資産形成か維持補修費の特定は、簿記の知識が必要となり、システムの自動計算で変換してくれない。
- ② 仕訳記帳されていない非資金取引（見えないお金）は、複式簿記により、仕訳帳に記載する。
 - ・発生主義取引による非資金仕訳例は、「財務書類作成要領」の「別表7」に例示されている。
 - ・作成担当者は、発生主義データの意味、計算過程を知る必要があるため、複式簿記の知識が必要である。

(3) 仕訳変換処理の単位

- ① 仕訳帳は、歳入歳出データを単位として、伝票単位毎に作成することを、原則とする。
- ② 歳入歳出データとの整合性が検証できる場合には、「予算科目単位で集計した歳入歳出データ」に仕訳を付与し、仕訳帳の1単位とすることも妨げない。」という、予算科目単位の集計値による変換法とする。（マニュアル「財務書類作成要領29段落」）

Ⅲ 令和3年度 財務書類 (要約)

(1) 貸借対照表(バランスシート)(令和4年3月31日)

令和4年3月31日現在に保有する資産、負債、純資産を表示したもので、地方自治体が、住民サービスを提供するために保有している資産と、その資産をどのような財源(負債・純資産)で賄ってきたのかについて、総括的に示したものです。行政的には、資産は、サービス提供能力を示し、負債は、将来世代の負担を示し、純資産は、現在までの世代の負担と捉えます。

(単位:百万円)

項目	資産の部						項目	負債の部					
	一般会計等		全体		連結			一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率		金額	比率	金額	比率	金額	比率
(1)固定資産	41,493	95%	63,518	95%	68,828	95%	(1)固定負債	16,267	37%	31,097	46%	33,908	47%
(1)有形固定資産	38,960	90%	59,104	88%	63,992	88%	①地方債等	14,108	32%	21,695	32%	23,981	33%
①事業用資産	21,589	50%	21,589	32%	25,536	35%	②退職手当引当金	2,159	5%	2,462	4%	2,856	4%
②インフラ資産	17,151	39%	37,147	55%	37,151	51%	③その他	0	0%	6,940	10%	7,071	10%
③物品	220	1%	368	1%	1,304	2%	(2)流動負債	1,675	4%	2,651	4%	3,073	4%
(2)無形固定資産	16	0%	971	1%	973	1%	①1年内償還予定地方債等	1,357	3%	2,163	3%	2,434	3%
(3)投資その他の資産	2,516	6%	3,444	5%	3,864	5%	②未払金	0	0%	131	0%	218	0%
①投資及び出資金	267	1%	270	0%	265	0%	③その他	319	1%	357	1%	422	1%
②長期延滞債権	70	0%	156	0%	156	0%							
③基金	2,172	5%	3,023	5%	3,444	5%	負債の部合計	17,943	41%	33,748	50%	36,981	51%
④徴収不能引当金	-10	0%	-23	0%	-23	0%	純資産の部						
⑤その他	17	0%	17	0%	23	0%	固定資産等形成分	42,142	97%	64,102	96%	69,402	96%
(2)流動資産	1,955	5%	3,432	5%	3,822	5%	余剰分(不足分)	-16,637	-38%	-30,900	-46%	-33,733	-46%
①現金預金	1,222	3%	2,573	4%	2,813	4%							
②未収金	22	0%	165	0%	312	0%							
③財政調整基金等	712	2%	712	1%	712	1%							
④徴収不能引当金	-0	0%	-33	0%	-37	0%							
⑤その他	0	0%	16	0%	22	0%	純資産の部合計	25,505	59%	33,202	50%	35,669	49%
資産の部合計	43,448	100%	66,951	100%	72,650	100%	負債・純資産の部合計	43,448	100%	66,951	100%	72,650	100%

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結	項目	一般会計等	全体	連結
資産の部	144 万円	222 万円	241 万円	負債の部	60 万円	112 万円	123 万円
				純資産の部	85 万円	110 万円	118 万円

項目の説明

- (1)-(1)有形固定資産
- ①事業用資産：庁舎や学校などの有形固定資産
 - ②インフラ資産：道路や河川などの社会基盤となる資産
 - ③物品：器具備品や機械装置などの資産
- (1)-(2)無形固定資産
- ソフトウェア等無形の資産
- (1)-(3)投資その他の資産
- ①投資及び出資金：運用目的の有価証券や出資金等の資産
 - ②長期延滞債権：税等の未収金や貸付金などの回収期限到来後1年を経過した資産
 - ③基金：特定の目的のために積立した資産
 - ④徴収不能引当金：長期延滞債権や長期の貸付金に対して徴収不能とみられる金額を見積り引当した金額
- (2)流動資産
- ①現金預金：形式収支額(歳入歳出の差し引き額)や歳計外現金などの現金や預金の資産
 - ②未収金：税込や使用料手数料のうち回収期限到来後1年を経過していない資産
 - ③財政調整基金等：財政調整基金や1年以内に地方債の償還に充てられる減債基金
- (1)固定負債
- ①地方債等：地方債・借入金残高のうち翌年度に償還する額を除いた残高
 - ②退職手当引当金：将来の退職者に対する給付すべきこととなる退職金の引当額
- (2)流動負債
- ①1年内償還予定地方債等：地方債・借入金残高のうち翌年度償還予定額
 - ②未払金：企業会計団体の財貨または用役の提供を受けたが、支払が済んでいない残高
- ◎ 純資産合計
- これまでの世代が負担して蓄積された資産

概要

今までに南陽市では、一般会計等ベースで434億円、全体ベースで670億円、連結ベースで727億円の資産を形成してきています。

そのうち、純資産である、255億円(一般会計等)、332億円(全体)、357億円(連結)については、これまでの世代の負担で支払いが済み、負債である179億円(一般会計等)、337億円(全体)、370億円(連結)について、これからの世代が負担していくことになります。

※ 令和4年3月31日の南陽市の人口： 30,148 人

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(2) 行政コスト計算書及び純資産変動計算書(令和3年4月1日から令和4年3月31日)

行政コスト計算書は、1年間の行政運営コストのうち、福祉サービスなどの提供といった資産形成に結びつかない行政サービスに要したコストを人件費、物件費、その他の業務費用、移転費用に区分して表示したものです。

純資産変動計算書(NWM)は、純資産(過去の世代や国・都道府県が負担した将来返済しなくてよい財産)が年度中にどのように増減したかを、①財源、②資産評価差額、③無償所管替等、④その他に区分して表示したものです。

(単位:百万円)

項目	一般会計等		全体		連結	
	金額	比率	金額	比率	金額	比率
1 経常費用 計 (行政コスト総額)	15,750	93%	22,756	100%	23,892	105%
① 人件費	2,589	15%	2,849	13%	3,823	17%
② 物件費等	4,938	29%	6,277	28%	7,424	33%
うち減価償却費	1,457	9%	2,208	10%	2,424	11%
③ その他の業務費用	219	1%	526	2%	582	3%
④ 移転費用	8,004	48%	13,104	58%	12,064	53%
2 経常収益	377	2%	1,553	7%	2,650	12%
3 臨時損失	1,475	9%	1,490	7%	1,508	7%
4 臨時利益	0	0%	4	0%	29	0%
純行政コスト	16,848	100%	22,690	100%	22,721	100%
5 財源	15,432	92%	21,478	95%	21,943	97%
① 税収等	10,364	62%	12,659	56%	13,069	58%
② 国県等補助金	5,067	30%	8,819	39%	8,874	39%
本年度差額	-1,417	-8%	-1,212	-5%	-778	-3%
6 資産評価差額	-0	0%	-0	0%	-0	0%
7 無償所管替等	1	0%	8	0%	8	0%
8 その他の純資産変動額	28	0%	28	0%	1,007	4%
本年度純資産変動額	-1,388	-8%	-1,176	-5%	237	1%
前年度末純資産残高	26,893	-	34,378	-	35,432	-
本年度末純資産残高	25,505	-	33,202	-	35,669	-
※固定資産等の変動(内部変動)・固定資産等形成分	-1,606	-	-1,735	-	-1,384	-
・有形固定資産等の増加	1,237	-	1,738	-	2,350	-
・有形固定資産等の減少	2,785	-	3,550	-	3,774	-
・貸付金・基金等の増加	1,234	-	1,369	-	1,400	-
・貸付金・基金等の減少	1,292	-	1,292	-	1,360	-

住民一人当たり

項目	一般会計等	全体	連結
1 純行政コスト	56 万円	75 万円	75 万円
2 財源	51 万円	71 万円	73 万円
3 本年度差額 (2財源-1純行政コスト)	-5 万円	-4 万円	-3 万円

項目の説明

1 経常費用	①人件費：職員給与や議員報酬、退職給付費用など ②物件費等：備品や消耗品、委託費、使用料施設等の維持修繕に係る経費や事業用資産の減価償却費など ③その他の業務費用：地方債、関係団体の借入金の償還利子や徴収不能引当金繰入額など ④移転費用：住民への補助金や児童手当、生活保護費などの社会保障費など
2 経常収益	施設を使用した際に徴収する使用料や証明書の発行手数料、財産売却収入、雑入など
3 臨時損失	災害復旧事業費、資産の除売却損など臨時に発生するもの
4 臨時利益	資産の売却益など臨時に発生するもの
5 財源	①税収等：市税や利子割交付金などの交付金、特別会計の保険料等の収入など ②国県等補助金：国や都道府県からの補助金収入
6 資産評価差額	有価証券等の評価差額など
7 無償所管替等	無償で譲渡または取得した固定資産の評価額など
※固定資産の変動	有形固定資産・貸付金・基金等将来世代に対する資産形成の状況をいう

概要

令和3年度の純行政コストは、一般会計等ベースで168億円、全体ベース227億円、連結ベースで227億円になります。

住民の皆さんが負担した市税や国県等補助金などの財源は、一般会計等ベースで154億円、全体ベースで215億円、連結ベースでは219億円になります。

純行政コストと財源に資産評価差額無償所管替等を加減した本年度純資産変動額は、一般会計等ベースで△14億円、全体ベースで△12億円、連結ベースで2億円であり、将来返済しなくてよい財産が一般会計等、全体で減少し、連結で増加したことになります。

また、将来の世代に対する固定資産の変動状況ですが、一般会計等ベースで△16億円、全体ベースで△17億円、連結ベースで△14億円となり、一般会計等、全体、連結すべてで減少しました。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(3) 資金収支計算書（令和3年4月1日から令和4年3月31日）

資金収支計算書は、1年間の資金の出入りを、現役世代に対する「業務活動収支」と、将来世代に対する「投資活動収支」と、将来世代が負担すべき「財務活動収支」という三つに区分した計算書です。

(単位：百万円)

項目	一般会計等	全体	連結
(イ)業務活動収支(④-③+②-①)	891	1,954	2,596
①業務支出(注)	14,323	20,276	21,194
②業務収入	15,369	22,383	23,927
③臨時支出	155	156	166
④臨時収入	0	4	28
(ロ)投資活動収支(②-①)	-889	-1,424	-1,930
①投資活動支出	2,471	3,086	3,729
②投資活動収入	1,582	1,662	1,799
利払後基礎的財政収支(イ+ロ)	2	530	666
(ハ)財務活動収支(②-①)	376	-133	-181
①財務活動支出	1,287	2,090	2,548
②財務活動収入	1,663	1,957	2,367
1 本年度資金収支額(イ+ロ+ハ)	377	398	486
2 前年度末歳計現金残高	821	2,151	2,293
3 比例連結割合変更に伴う差額	0	0	10
4 本年度末歳計現金残高(1+2+3)	1,198	2,549	2,789
5 本年度末歳計外現金残高	24	24	24
6 本年度末現金預金残高(4+5)	1,222	2,573	2,813
(注)うち、地方債等支払利息支出	92	220	235

項目の説明

イ-①業務支出：行政サービスを行う中で、毎年度継続的に支出されるもの
(人件費、物件費、補助費、扶助費など)

イ-②業務収入：行政サービスを行う中で、毎年度継続的に収入されるもの
(市税、保険料、使用料、手数料など)

イ-③臨時支出：行政サービスを行う中で、臨時的に支出されるもの(災害復旧事業費など)

イ-④臨時収入：行政サービスを行う中で、臨時的に収入されるもの
(資産の売却に伴う収入など)

ロ-①投資活動支出：公共施設や道路整備などの資産形成、投資や貸付金などの金融資産形成に支出したもの

ロ-②投資活動収入：公共施設の資産形成の財源に充てられた補助金収入、土地などの固定資産の売却収入など

ハ-①財務活動支出：地方債や借入金などの元本の償還

ハ-②財務活動収入：地方債や借入金の収入

概要

令和3年度は、一般会計等ベースで4億円、全体ベースで4億円、連結ベースで5億円の資金が変動し、期末資金残高は、一般会計等ベースで12億円、全体ベースで25億円、連結ベースで28億円になりました。

利払後基礎的財政収支は、公債費を賄う財源となるものですが、一般会計等ベースで0億円、全体ベースで5億円、連結ベースで7億円でした。

※四捨五入したため一致しない部分があります。

(4) 財務書類の相関図

下記は、財務書類3表の関係を表しています。(一般会計等)

(単位:百万円)

【資金収支計算書=CF】	
項目	金額
(イ)業務活動収支	891
①業務支出	14,323
②業務収入	15,369
③臨時支出	155
④臨時収入	0
(ロ)投資活動収支	-889
①投資活動支出	2,471
②投資活動収入	1,582
(ハ)財務活動収支	376
①財務活動支出	1,287
②財務活動収入	1,663
1 本年度資金収支額(イ+ロ+ハ)	377
2 前年度末資金残高	821
3 本年度末資金残高(1+2)	1,198
4 本年度末歳計外現金残高	24
5 本年度末現金預金残高(3+4)	1,222

注)1年間の資金の出入りを表す資金収支計算書の「本年度末現金預金残高」は、下記の貸借対照表の資産の部に計上されます。

(単位:百万円)

【行政コスト計算書及び純資産変動計算書=NW】			
項目		金額	
経常費用		15,750	4表形式では、純行政コストまでが「行政コスト計算書」、財源から下が「純資産変動計算書」となる
業務費用		7,745	
移転費用		8,004	
経常収益		377	
臨時損失		1,475	固定資産等形成分
臨時利益		0	余剰分(不足分)
純行政コスト		16,848	16,848
財源		15,432	15,432
本年度差額		-1,417	-1,417
固定資産等の変動(内部変動)			-1,606 1,606
有形固定資産等の増加			1,237 -1,237
有形固定資産等の減少			2,785 -2,785
貸付金・基金等の増加			1,234 -1,234
貸付金・基金等の減少			1,292 -1,292
資産評価差額		-0	-0
無償所管換等		1	1
その他		28	
本年度純資産変動額		-1,388	
前年度末純資産残高		26,893	
本年度末純資産残高		25,505	42,142 -16,637

(注)1年間の行政コストと財源等の収支尻を表す「本年度末純資産残高」は、下記の貸借対照表の純資産の部に計上されます。

(単位:百万円)

【貸借対照表=BS】			
資産の部		負債・純資産の部	
(1)固定資産	41,493	(1)固定負債	16,267
有形固定資産	38,960	(2)流動負債	1,675
無形固定資産	16	負債の部合計	17,943
投資その他の資産	2,516	固定資産等形成分	42,142
(2)流動資産	1,955	余剰分(不足分)	-16,637
現金預金	1,222		
その他	733	純資産の部合計	25,505
資産の部合計	43,448	負債・純資産の部合計	43,448

(注)貸借対照表の純資産の部の「固定資産等形成分」の計算

① 開始時の「純資産の部合計」の計算

➡「資産の部合計」-「負債の部合計」……差額である

② NWの本年度末残高と照合する、BS残高の算出方法

➡(固定資産合計-長期延滞債権+固定徴収不能引当金+投資損失引当金)+(短期貸付金+流動基金)

(注)「長期延滞債権」とは収入未済の滞納繰越分であり、その歳入金額は「余剰分」に含まれて「固定資産等形成分」に含まれないので、その算出から除外する。

③ 余剰分(不足分)の計算

➡「純資産の部合計」-「固定資産等形成分」……差額である

IV 分析比率

1. 社会資本形成の世代間比率〔地方債等／（事業用資産＋インフラ資産＋物品）〕

- 社会資本の整備の結果を示す事業用資産とインフラ資産と物品を地方債等などによってどれくらい調達したかを表します。

この指標が高いほど将来の世代が負担する割合が高いことを表します。

	令和3年度	令和2年度	比較増減
一般会計等	39.7%	37.3%	2.4%
全体	40.4%	39.4%	0.9%
連結	41.3%	40.6%	0.7%

2. 純資産比率〔純資産／総資産〕

- 企業会計でいう「自己資本比率」に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。

総資産のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。

	令和3年度	令和2年度	比較増減
一般会計等	58.7%	60.4%	-1.7%
全体	49.6%	50.5%	-0.9%
連結	49.1%	49.3%	-0.3%

3. 有形固定資産減価償却率〔減価償却累計額÷（有形固定資産－土地等＋減価償却累計額）〕

- 有形固定資産が耐用年数に対して、資産の取得からどの程度経過しているのかを全体として把握することができます。

	令和3年度	令和2年度	比較増減
一般会計等	57.1%	56.2%	0.9%
全体	50.7%	49.7%	1.0%
連結	52.5%	50.4%	2.1%

4. 受益者負担比率〔経常収益÷経常費用〕

- 行政コスト計算書の経常収益は、使用料・手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額ですので、これを経常費用と比較することにより、行政サービスの提供に対する受益者負担の割合を算出することができます。

	令和3年度	令和2年度	比較増減
一般会計等	2.4%	1.7%	0.7%
全体	6.8%	6.3%	0.5%
連結	11.1%	10.0%	1.1%

V 財務書類からわかること

(1) 比較分析のための前提条件

(注1) 統一的な基準で財務書類を作成している他の5団体(可能な限り同規模)と比較し、分析比率を算出する。

(注2) 他団体数値は、前年度公表データから引用しているが、空欄は未公表部分である。

(注3) 四捨五入をしたため一致しない部分があります。

・ 分析比率算定のための基礎データ

	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民数:人数	30,148	80,626	29,417	25,930	34,524	47,576
面積:Km ²	160.52	548.51	240.93	214.67	222.85	206.94
可住地面積:Km ²	64.92	133.29	78.58	79.08	96.34	75.12
職員数	285	988	316	290	274	374
財政力指数	0.48	0.59	0.50	0.45	0.53	0.68
経常収支比率	88.2	92.5	93.3	85.3	94.1	93.3
実質公債費比率	12.0	8.2	6.8	11.3	7.2	7.1
将来負担比率	127.1	47.7	66.8	232.0	18.0	13.5
特記事項						

(2) 貸借対照表から見える将来の負担

本年3月末時点の財政状態を、「どれだけ資産を持っているのか。」または、「将来負担がどれだけ残っているのか。」、どちらの視点で見るのか？ ここでは、後者の将来のリスクの観点から見ます。

住民サービスに供されている資産総額のうち、「将来の負担」が、どの程度あるのか？

▶本年度末の資産総額に占める負債総額の割合は、41.3%となっている。

(a) 経年比較

(単位:百万円)

区分	項目	28	29	30	R01	R02	R03
資産合計	一般会計等	48,007	47,187	46,502	45,451	44,505	43,448
	全体会計	72,363	71,468	70,709	69,104	68,126	66,951
	連結会計	75,694	74,627	73,983	72,709	71,798	72,650
負債合計	一般会計等	18,653	18,185	18,059	17,820	17,612	17,943
	全体会計	36,880	36,237	35,581	34,485	33,747	33,748
	連結会計	39,576	38,672	37,938	37,187	36,366	36,981
負債の割合	一般会計等	38.9%	38.5%	38.8%	39.2%	39.6%	41.3%
	全体会計	51.0%	50.7%	50.3%	49.9%	49.5%	50.4%
	連結会計	52.3%	51.8%	51.3%	51.1%	50.7%	50.9%

(b) 他団体比較

(単位:百万円)

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
資産合計	一般会計等	43,448	125,230	51,092	37,728	60,569	63,244
	全体会計	66,951	183,841	74,957	60,702	84,000	101,041
	連結会計	72,650	193,698	78,512	67,709	90,225	106,101
負債合計	一般会計等	17,943	43,272	19,359	25,751	18,042	22,751
	全体会計	33,748	82,286	35,471	41,859	35,046	44,072
	連結会計	36,981	87,815	37,515	46,175	35,580	46,203
負債の割合	一般会計等	41.3%	34.6%	37.9%	68.3%	29.8%	36.0%
	全体会計	50.4%	44.8%	47.3%	69.0%	41.7%	43.6%
	連結会計	50.9%	45.3%	47.8%	68.2%	39.4%	43.5%

(3) 実質債務(地方債等と現金預金)の状況

住民一人当たり実質債務で「将来の負担」をみる場合、他団体と比較してみると?

→本年度末では、11,360百万円あるが、住民一人当たりの実質債務は、376,793円である。

(a) 経年推移

★一般会計等の実質債務

(単位:百万円)

区分	項目	28	29	30	R01	R02	R03
借金	地方債等	14,788	14,385	14,301	14,074	13,804	14,108
	1年以内償還予定地方債等	1,252	1,256	1,250	1,266	1,287	1,357
	合計	16,040	15,641	15,552	15,340	15,091	15,465
貯金	固定基金	1,013	1,325	1,252	1,642	2,105	2,172
	現金預金	798	999	1,124	1,063	840	1,222
	財政調整基金等	1,574	1,226	1,114	878	672	712
	合計	3,385	3,550	3,491	3,583	3,618	4,105
	差引	12,655	12,091	12,061	11,757	11,473	11,360

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	24,812	23,912	23,358	22,656	21,903	21,695
	1年以内償還予定地方債等	2,102	2,082	2,061	2,052	2,090	2,163
	合計	26,914	25,994	25,418	24,709	23,993	23,859
貯金	固定基金	1,494	1,852	1,824	2,281	2,823	3,023
	現金預金	2,065	2,388	2,664	2,293	2,171	2,573
	財政調整基金等	1,574	1,226	1,114	878	672	712
	合計	5,134	5,466	5,602	5,452	5,666	6,308
	差引	21,781	20,527	19,816	19,257	18,327	17,551

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	26,400	25,514	24,879	24,464	23,629	23,981
	1年以内償還予定地方債等	2,649	2,315	2,316	2,311	2,308	2,434
	合計	29,049	27,829	27,196	26,775	25,937	26,415
貯金	固定基金	1,827	2,220	2,216	2,626	3,181	3,444
	現金預金	2,360	2,515	2,802	2,431	2,312	2,813
	財政調整基金等	1,574	1,226	1,114	878	672	712
	合計	5,761	5,961	6,132	5,935	6,165	6,968
	差引	23,287	21,868	21,064	20,840	19,772	19,447

(b)他団体比較

★一般会計等の実質債務

(単位:百万円)

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
借金	地方債等	14,108	34,849	15,178	21,160	14,111	18,049
	1年以内償還予定地方債等	1,357	3,067	1,248	1,187	1,377	1,860
	合計	15,465	37,916	16,426	22,347	15,488	19,909
貯金	固定基金	2,172	5,584	1,305	1,282	3,204	2,890
	現金預金	1,222	1,603	1,068	615	1,606	710
	財政調整基金等	712	2,021	1,947	543	941	2,787
	合計	4,105	9,208	4,320	2,440	5,751	6,387
差引		11,360	28,708	12,106	19,907	9,737	13,522

★全体決算の実質債務

借金	地方債等	21,695	51,285	24,351	29,630	21,036	27,107
	1年以内償還予定地方債等	2,163	4,682	1,808	2,129	2,234	2,524
	合計	23,859	55,967	26,159	31,759	23,270	29,631
貯金	固定基金	3,023	7,470	2,770	1,466	4,187	3,545
	現金預金	2,573	4,664	2,135	1,867	3,393	4,507
	財政調整基金等	712	2,021	1,947	715	941	2,787
	合計	6,308	14,155	6,852	4,048	8,521	10,839
差引		17,551	41,812	19,307	27,711	14,749	18,792

★連結決算の実質債務

借金	地方債等	23,981	54,595	26,221	32,396	21,336	28,193
	1年以内償還予定地方債等	2,434	5,512	1,891	2,514	2,299	2,761
	合計	26,415	60,107	28,112	34,910	23,635	30,954
貯金	固定基金	3,444	8,795	2,888	2,310	4,805	4,068
	現金預金	2,813	6,099	2,841	2,438	3,954	5,286
	財政調整基金等	712	2,022	1,948	716	954	2,788
	合計	6,968	16,916	7,677	5,464	9,713	12,142
差引		19,447	43,191	20,435	29,446	13,922	18,812

(c) 住民一人当たり実質債務(財政の健全化の指標)

(単位:円)

区分	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
住民一人 当たり 実質債務 残高	一般会計等	376,793	356,064	411,531	767,721	282,036	284,219
	全体会計	582,154	518,592	656,321	1,068,685	427,210	394,989
	連結会計	645,046	535,696	694,666	1,135,596	403,256	395,409

(注)計算式=実質債務(臨財債を含む)÷住民数

(d) 臨時財政対策債の経年推移

決算統計33表58行近辺の2列目・4列目より

(単位:百万円)

区分	項目	28	29	30	R01	R02	R03
臨時財政 対策債	発行額	414	426	420	342	327	321
	元金償還額	327	360	393	425	453	479
	現在高	5,646	5,712	5,739	5,656	5,530	5,372

(単位:百万円)

区分	項目	28	29	30	R01	R02	R03
臨財債 控除後現 在高	一般会計等	10,394	9,929	9,813	9,684	9,561	10,093
	全体会計	21,268	20,282	19,679	19,053	18,463	18,487
	連結会計	23,403	22,117	21,457	21,119	20,407	21,043

(4)純資産変動計算書の「本年度差額」の状況

貸借対照表のように過去から現在までの自治体の蓄積でなく、本年度の発生主義による数値を見ます。

①「本年度差額」は、民間企業の利益の計算式と同じですが、そういう観点に立った場合どうだったのか？

→本年度の純行政コストと財源の差額である「本年度差額」は、一般会計等で-1,417百万円である。

(a) 経年比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	28	29	30	R01	R02	R03
一般会計等	① 人件費	2,293	2,230	2,174	2,262	2,751	2,589
	② 物件費等	4,341	4,561	4,675	4,933	5,390	4,938
	③ その他の業務費用	223	200	184	189	205	219
	④ 移転費用	5,967	6,426	5,762	6,395	9,363	8,004
	経常収益	332	357	382	342	304	377
	臨時損失	67	8	21	22	0	1,475
	臨時利益	300	66	2	3	4	0
	純行政コスト	12,259	13,002	12,432	13,455	17,401	16,848
	① 税金等	9,404	9,377	9,114	9,602	9,647	10,364
	② 国県等補助金	2,993	3,274	2,718	2,987	7,078	5,067
	財源	12,397	12,651	11,832	12,589	16,725	15,432
	本年度差額	138	-351	-600	-866	-676	-1,417
全体	① 人件費	2,555	2,673	2,418	2,486	2,987	2,849
	② 物件費等	5,647	5,897	6,004	6,251	6,717	6,277
	③ その他の業務費用	489	453	454	484	495	526
	④ 移転費用	11,624	11,939	10,884	11,611	14,369	13,104
	経常収益	1,471	1,479	1,551	1,593	1,544	1,553
	臨時損失	75	197	36	105	5	1,490
	臨時利益	300	78	2	3	4	4
	純行政コスト	18,619	19,602	18,243	19,340	23,024	22,690
	① 税金等	13,865	13,693	11,581	12,038	12,139	12,659
	② 国県等補助金	5,370	5,653	6,511	6,732	10,700	8,819
	財源	19,235	19,346	18,092	18,769	22,839	21,478
	本年度差額	616	-256	-151	-570	-185	-1,212
連結	① 人件費	3,349	3,555	3,231	3,472	3,935	3,823
	② 物件費等	6,649	6,863	6,776	7,142	7,535	7,424
	③ その他の業務費用	525	493	493	531	544	582
	④ 移転費用	11,040	11,352	10,136	10,856	13,518	12,064
	経常収益	2,479	2,547	2,413	2,651	2,553	2,650
	臨時損失	94	208	46	120	36	1,508
	臨時利益	26	107	26	43	45	29
	純行政コスト	19,152	19,817	18,243	19,426	22,970	22,721
	① 税金等	14,085	13,917	11,609	12,190	12,182	13,069
	② 国県等補助金	5,399	5,668	6,602	6,798	10,703	8,874
	財源	19,484	19,585	18,211	18,987	22,885	21,943
	本年度差額	332	-232	-32	-439	-85	-778
減価償却費	一般会計等	1,567	1,551	1,560	1,570	1,543	1,457
	全体会計	2,301	2,290	2,304	2,316	2,293	2,208
	連結会計	2,533	2,447	2,473	2,491	2,460	2,424

(注)民間企業では、「本年度差額」が「利益」に相当するのでプラスの必要があるが、公会計は利益目的ではない。

公会計の場合、減価償却費が計上されるので、ほとんどの自治体でマイナスになる。

→プラスかマイナスかが重要でなく、その水準での経年推移の分析が、重要である。

(b) 自治体間比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	① 人件費	2,589	4,987	2,576	2,626	2,355	2,802
	② 物件費等	4,938	11,834	5,434	5,026	6,488	8,506
	③ その他の業務費用	219	547	146	131	204	183
	④ 移転費用	8,004	26,184	8,477	9,549	11,336	13,223
	経常収益	377	724	467	509	433	480
	臨時損失	1,475	12	154	77	176	38
	臨時利益	0	365	4	4	4	5
	純行政コスト	16,848	42,475	16,316	16,896	20,122	24,267
	① 税収等	10,364	23,085	10,887	10,389	12,291	14,092
	② 国県等補助金	5,067	18,564	6,165	7,178	8,527	9,964
	財源	15,432	41,649	17,052	17,567	20,818	24,056
	本年度差額	-1,417	-826	736	671	696	-211
全体	① 人件費	2,849	10,033	2,754	2,753	2,492	3,098
	② 物件費等	6,277	18,040	7,160	6,312	8,213	10,508
	③ その他の業務費用	526	1,476	417	413	537	403
	④ 移転費用	13,104	38,160	14,418	13,941	17,261	20,541
	経常収益	1,553	9,782	1,670	1,714	1,645	2,364
	臨時損失	1,490	199	160	85	47	66
	臨時利益	4	516	4	8	4	5
	純行政コスト	22,690	57,610	23,235	21,782	26,901	32,247
	① 税収等	12,659	29,758	13,885	12,697	15,469	17,699
	② 国県等補助金	8,819	27,704	10,207	10,303	12,321	14,886
	財源	21,478	57,462	24,092	23,000	27,790	32,585
	本年度差額	-1,212	-148	857	1,218	889	338
連結	① 人件費	3,823	11,576	3,210	4,713	3,269	4,958
	② 物件費等	7,424	26,317	7,698	8,660	8,867	12,119
	③ その他の業務費用	582	1,775	604	561	613	654
	④ 移転費用	12,064	44,858	17,873	15,081	19,432	24,157
	経常収益	2,650	17,635	2,253	4,693	1,695	4,832
	臨時損失	1,508	202	161	147	47	115
	臨時利益	29	517	4	102	4	53
	純行政コスト	22,721	66,576	27,289	24,367	30,529	37,118
	① 税収等	13,069	34,034	15,793	13,881	17,341	20,016
	② 国県等補助金	8,874	32,671	12,440	12,105	14,233	17,503
	財源	21,943	66,705	28,233	25,986	31,574	37,519
	本年度差額	-778	129	944	1,619	1,045	401
減価償却費	一般会計等	1,457	4,308	1,689	1,279	1,773	2,182
	全体会計	2,208	6,365	2,611	2,129	2,807	3,412
	連結会計	2,424	6,706	2,786	2,420	3,116	3,739
一般会計等	人件費÷純行政コスト	15.4%	11.7%	15.8%	15.5%	11.7%	11.5%
	物件費÷純行政コスト	29.3%	27.9%	33.3%	29.7%	32.2%	35.1%
	移転費用÷純行政コスト	47.5%	61.6%	52.0%	56.5%	56.3%	54.5%
	国県等補助金÷財源	32.8%	44.6%	36.2%	40.9%	41.0%	41.4%

(5)純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況

将来世代への投資は、魅力的な町造りのためには、必須のものであるが、将来世代に対する投資水準を表した純資産変動計算書の「固定資産等の変動」の状況がどうだったのか？

▶将来世代のための投資水準の変動を表す「固定資産等の変動」は、-1,606百万円であり、有形固定資産の変動額は、-1,548百万円で、金融資産の変動額は、-58百万円である。

しかし、少子高齢化を踏まえ、長期計画立案の上で投資を決定する必要がある。

(a) 経年比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	28	29	30	R01	R02	R03
一般 会計等	固定資産等の変動(内部変動)	-208	-1,024	-844	-955	-735	-1,606
	有形固定資産等の増加	379	565	919	467	552	1,237
	有形固定資産等の減少	1,569	1,551	1,576	1,570	1,543	2,785
	貸付金・基金等の増加	1,255	718	943	1,159	1,213	1,234
	貸付金・基金等の減少	273	756	1,130	1,010	957	1,292
全体	固定資産等の変動(内部変動)	-516	-1,154	-1,060	-1,121	-861	-1,735
	有形固定資産等の増加	950	1,217	1,464	1,012	1,138	1,738
	有形固定資産等の減少	2,429	2,379	2,381	2,350	2,332	3,550
	貸付金・基金等の増加	1,308	836	1,013	1,278	1,322	1,369
	貸付金・基金等の減少	345	828	1,156	1,061	988	1,292
連結	固定資産等の変動(内部変動)	-334	-1,020	-878	-796	-940	-1,384
	有形固定資産等の増加	1,297	1,343	1,801	1,436	1,238	2,350
	有形固定資産等の減少	2,752	2,538	2,551	2,566	2,521	3,774
	貸付金・基金等の増加	1,328	877	1,039	1,269	1,338	1,400
	貸付金・基金等の減少	208	702	1,167	936	995	1,360

(b) 自治体間比較

NWMより

(単位:百万円)

区分	項目	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般 会計等	固定資産等の変動(内部変動)	-1,606	1,576	-396	6,607	190	298
	有形固定資産等の増加	1,237	5,056	807	7,204	2,065	2,650
	有形固定資産等の減少	2,785	4,511	1,695	1,304	1,813	2,221
	貸付金・基金等の増加	1,234	3,520	884	1,991	1,637	2,218
	貸付金・基金等の減少	1,292	2,489	392	1,284	1,699	2,349
全体	固定資産等の変動(内部変動)	-1,735	4,213	-118	6,281	-699	318
	有形固定資産等の増加	1,738	6,834	1,974	7,727	2,299	3,795
	有形固定資産等の減少	3,550	6,673	2,619	2,171	2,883	3,450
	貸付金・基金等の増加	1,369	5,869	1,006	2,025	1,510	2,367
	貸付金・基金等の減少	1,292	1,817	479	1,300	1,625	2,394
連結	固定資産等の変動(内部変動)	-1,384	3,954	-228	6,201	-962	408
	有形固定資産等の増加	2,350	6,902	2,080	7,978	2,338	4,211
	有形固定資産等の減少	3,774	7,018	2,809	2,500	3,193	3,785
	貸付金・基金等の増加	1,400	5,997	1,008	2,065	1,563	2,470
	貸付金・基金等の減少	1,360	1,927	507	1,342	1,670	2,488

(6) 資金収支計算書から読みとれる二つの基礎的財政収支(プライマリーバランス)の状況

・基金への積み立てを、投資活動収支に含める(①)か、含めないか、二つの異なった健康診断がなされる。

業務活動収支と投資活動収支を合算した利払後基礎的財政収支が、ゼロ以上であれば、地方債に依存しない財政運営が行われたこととなりますが、どうだったのか？

➡本年度の利払後基礎的財政収支は、2百万円であり、基金への積み立てを含めない場合は、-56百万円です。

・なお、臨財債を借金と見ない場合の収支を一般会計についてのみ示した。

(a) 経年比較

(単位: 百万円)

区分	決算年度	28	29	30	R01	R02	R03
一般会計等	業務活動収支	1,383	1,070	778	667	661	891
	投資活動収支	-1,263	-462	-642	-572	-499	-889
	利払後基礎的財政収支(①)	120	608	136	94	163	2
	基金等増加(②)	982	-38	-187	149	255	-58
	基金除外後(①+②)	1,102	570	-50	243	418	-56
	臨時財政対策債増加(③)	87	66	27	-83	-126	-158
	臨財債除外後(①+②)	1,189	636	-23	160	292	-214
全体	業務活動収支	2,369	2,007	1,862	1,344	1,738	1,954
	投資活動収支	-1,554	-756	-1,089	-1,062	-1,008	-1,424
	利払後基礎的財政収支(①)	815	1,251	773	282	730	530
	基金等増加(②)	963	8	-143	216	334	77
	基金除外基礎的財政収支(①+②)	1,778	1,259	631	498	1,064	607
連結	業務活動収支	2,762	2,360	2,053	1,573	1,973	2,596
	投資活動収支	-1,888	-880	-1,344	-1,336	-1,082	-1,930
	利払後基礎的財政収支(①)	874	1,481	709	237	891	666
	基金等増加(②)	1,120	175	-128	334	342	40
	基金除外基礎的財政収支(①+②)	1,995	1,656	581	570	1,233	707

(単位: 年)

区分	決算年度	28	29	30	R01	R02	R03
地方債等償還可能年数	一般会計等	133	26	114	163	93	9,608
	全体会計	33	21	33	88	33	45
	連結会計	33	19	38	113	29	40

(b)他団体比較

(単位:百万円)

	区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
一般会計等	業務支出	14,323	39,296	14,944	15,817	18,575	22,533
	業務収入	15,369	41,450	17,116	17,197	20,663	23,746
	臨時支出	155	0	138	61	0	0
	臨時収入	0	0	18	15	0	0
	業務活動収支(現役世代収支)	891	2,154	2,052	1,334	2,088	1,213
	投資活動支出	2,471	10,217	2,398	7,397	4,583	4,816
	投資活動収入	1,582	5,425	1,482	2,129	2,904	3,013
	投資活動収支(将来世代収支)	-889	-4,792	-916	-5,268	-1,679	-1,803
	利払後基礎的財政収支(①)	2	-2,638	1,136	-3,934	409	-590
	基金等増加(②)	-58	1,031	492	707	-62	-131
基金除外基礎的財政収支(①+②)	-56	-1,607	1,628	-3,227	347	-721	
全体	業務支出	20,276	61,344	22,105	21,216	25,586	31,465
	業務収入	22,383	65,394	25,071	23,367	28,498	33,720
	臨時支出	156	187	144	70	7	29
	臨時収入	4	151	21	19	0	0
	業務活動収支(現役世代収支)	1,954	4,014	2,843	2,100	2,905	2,226
	投資活動支出	3,086	17,878	3,792	7,849	4,700	5,824
	投資活動収入	1,662	8,900	1,985	2,235	3,022	3,315
	投資活動収支(将来世代収支)	-1,424	-8,978	-1,807	-5,614	-1,678	-2,509
	利払後基礎的財政収支(①)	530	-4,964	1,036	-3,514	1,227	-283
	基金等増加(②)	77	4,052	527	725	-115	-27
基金除外基礎的財政収支(①+②)	607	-912	1,563	-2,789	1,112	-310	
連結	業務支出	21,194	77,787	26,604	26,486	29,176	38,422
	業務収入	23,927	82,435	29,745	29,054	32,332	41,009
	臨時支出	166	187	144	124	7	77
	臨時収入	28	151	21	53	0	48
	業務活動収支(現役世代収支)	2,596	4,612	3,018	2,497	3,149	2,558
	投資活動支出	3,729	18,073	3,869	8,073	4,778	6,422
	投資活動収入	1,799	9,015	2,043	2,565	3,067	3,555
	投資活動収支(将来世代収支)	-1,930	-9,058	-1,826	-5,508	-1,711	-2,867
	利払後基礎的財政収支(①)	666	-4,446	1,192	-3,011	1,438	-309
	基金等増加(②)	40	4,070	501	723	-107	-18
基金除外基礎的財政収支(①+②)	707	-376	1,693	-2,288	1,331	-327	

- ・ 作成方法は、歳入歳出決算書の「款・節・細節」から繰越金・地方債発行・元金償還金を除外する。
- ・ 「基礎的財政収支」がゼロで成長率が利子率以上の場合、地方債残高は増えないとされている。しかし、成長率が利子率以上という前提が成立しない場合には、利子償還金相当額、地方債残高は増加していくのである。
- ・ 財務省のHPでは、「財政収支」という言葉で表現されている。「基礎的財政収支が均衡したとしても利払い費だけ債務残高の実額は増加してしまうのである。これを止めるためには、利払い費を含む財政収支を均衡させる必要がある。この財政収支の均衡とは、新たに借金をする額と過去の借金を返す額が同額である状態を言う。」

★ 特徴

- ・ 当該年度で地方債を財源とする大きな普通建設事業があると、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。
- ・ 財政調整基金等の大きな貯金を行うと、投資活動支出に含まれるので、利払後基礎的財政収支は悪化するであろう。

(a) 地方債等償還可能年数を比較(財政の健全性の指標)

・ 利払後基礎的財政収支の数値がマイナスの場合は指標として意味を成しませんが、プラスの場合、年度末の「地方債残高」から除して「地方債等償還可能年数」を算出できるので、自治体の現在の財政状態が示されます。

➡ 地方債等償還可能年数は、本年度、9.608年です。

- ・ 「地方債等償還可能年数」は、自治体の現在の財政状態を表す重要な指標である。

(単位:年)

指標	会計区分	南陽市	米沢市	上山市	長井市	新庄市	東根市
地方債等 償還 可能年数 (注)	一般会計等	9,608	-14	14	-6	38	-34
	全体会計	45	-11	25	-9	19	-105
	連結会計	40	-14	24	-12	16	-100

(注)計算式＝地方債等残高 ÷ 利払後基礎的財政収支

★ 特徴

- ・ 地方債等償還可能年数は、本年度の収支が続くと仮定して、地方債等残高がゼロになる必要年数である。
- ・ 他団体の連結の平均的な年数であるが、当事務所のデータによれば、住民数20万人台の自治体では、概ね20年から40年という数値の財政状態のところが多くなっている。
- ・ 住民数50万人以上の自治体では、利払後基礎的財政収支、地方債等償還可能年数がマイナスで、地方債残高が増えていくという状況のところが多くなっている。

(7)歳入歳出決算書の経年データ

歳入歳出決算書より

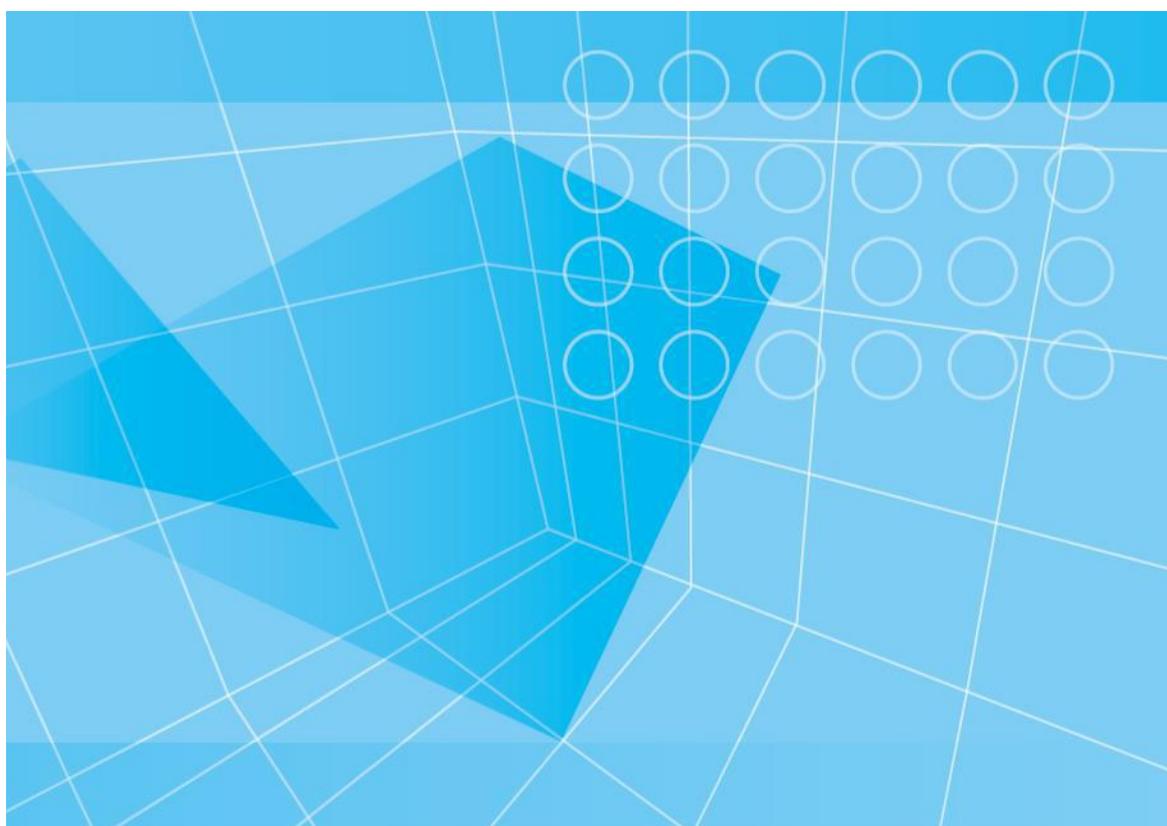
(単位:百万円)

款 or 節		28	29	30	R01	R02	R03
予算現額		15,772	15,437	15,546	16,303	21,517	19,716
収入済額	市町村税	3,537	3,600	3,595	3,730	3,618	3,452
	地方消費税交付金	534	564	608	571	700	757
	地方交付税	4,427	4,266	4,135	4,087	4,163	4,823
	国庫支出金	1,719	1,636	1,686	1,955	5,847	3,801
	都道府県支出金	1,274	1,639	1,032	1,032	1,231	1,266
	その他の款	1,535	2,111	2,293	2,627	2,409	2,848
	小計(①)	13,026	13,816	13,349	14,002	17,968	16,947
	繰越金	1,118	762	968	956	963	818
地方債発行	789	853	1,166	1,098	955	1,663	
合計(②)	14,933	15,431	15,483	16,056	19,886	19,428	
予算現額と収入済額との比較(予算差異)		839	6	63	247	1,631	288
支出済額	委託料	1,663	1,918	1,814	1,758	2,054	2,193
	工事請負費	530	625	1,149	988	894	1,403
	負担金及び補助交付金	2,387	2,697	1,884	2,404	5,584	3,614
	扶助費	1,979	2,507	2,214	2,294	2,337	2,747
	繰出金	1,602	1,644	1,622	1,670	1,632	1,608
	その他の節	4,594	3,682	4,393	4,615	5,200	5,289
	小計(③)	12,755	13,073	13,076	13,729	17,701	16,854
	地方債費	1,416	1,391	1,382	1,364	1,367	1,379
合計(④)	14,171	14,464	14,458	15,093	19,068	18,233	
不用額		839	6	63	247	1,631	288
歳入歳出差引額(②-④)		762	967	1,025	963	818	1,195
実質収支 に関する 調書 より記入	翌年度へ繰越すべき財源	50	32	104	22	20	12
	実質収支額	712	935	921	941	798	1,183
	基金繰入額	0	0	0	0	0	0
	翌年度繰越金	712	935	921	941	798	1,183

財源内訳

決算統計 13表 より記入	国庫支出金	1,699	1,625	1,688	1,943	5,849	3,371
	都道府県支出金	1,274	1,638	1,029	1,027	1,228	1,160
	使用料手数料	149	163	152	137	95	96
	分担金負担金寄附金	194	207	206	156	897	117
	財産収入	15	16	15	12	20	14
	繰入金	83	55	288	149	929	464
	諸収入	147	133	126	150	213	168
	繰越金	0	0	0	0	969	0
	地方債	374	427	747	757	955	1,341
	一般財源等	10,224	10,188	10,198	10,750	8,722	11,490
歳出合計	14,159	14,452	14,449	15,081	19,877	18,221	

令和3年度 南陽市の財務書類 【分析編】



南陽市財政課

令和3年度決算に係る「統一的な基準による財務書類」について、以下の各表から抽出したデータを活用し、分析を行いました。

◆貸借対照表

貸借対照表は、基準日時点において、地方公共団体が住民サービスを提供するために、どれほどの資産や債務を有するかについて情報を示すものです。資産と財源となる負債及び純資産の合計は必ず一致します。負債は、将来世代の負担を意味し、純資産は、現在までの世代の負担ととらえます。

資産規模がどの程度あり（資産合計）、それに対する将来世代の負担（負債合計）が何%あるのか、また、一般会計等、全体会計、連結会計のそれぞれの区分ごとにどの程度あるのかを読み取ることができます。

◆行政コスト計算書

行政コスト計算書は、行政コストという経費明細という位置付けにあり、発生主義数値を含んだ現役世代に対する資源の配分の状況を示しています。行政コストの面では、人にかかるコストである人件費、物にかかるコストである物件費等、移転的な支出である移転費用等といった区分が設けてあります。

◆純資産変動計算書

貸借対照表の「純資産の部」に計上されている各数値が1年間でどのように変動したかを表している計算書です。

一会計期間に、税収と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのか、また、将来世代に対してどの程度資源配分したのか、つまり発生主義数値ではあるが住民から拠出された税収等が、どのように配分されたのかということを表しています。

◆資金収支計算書

資金収支計算書は、「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」という表示区分を設けて収支状況を明示しています。

業務活動収支：地方公共団体の経営活動に伴い、継続的に発生する資金収支

投資活動収支：地方公共団体の将来世代に対する投資活動に伴い発生する資金収支

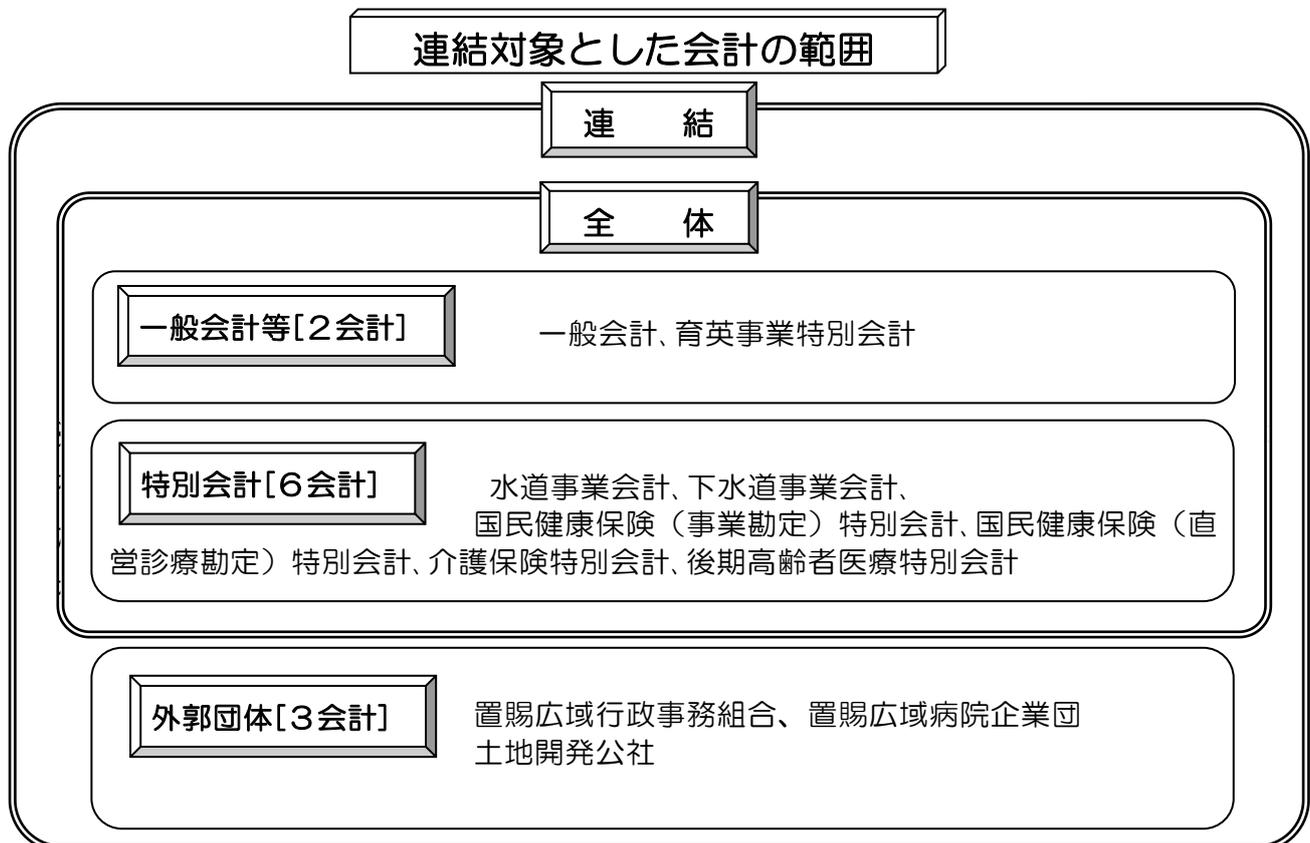
財務活動収支：地方公共団体の負債の管理に係る資金収支（負債の発行及び償還）

業務活動収支は税金と補助金収入を財源として、現役世代に対してどの程度資源配分したのかを表します。業務活動収支と投資活動収支を合算して、プラスの場合借金が減少したことを意味し、マイナスの場合借金が増加したことを意味します。

3つの収支について、主なタイプの例示（赤色矢印の方向が資金の流れを示します。）

タイプ例	図解	汲み取ることのできる内容
健全タイプ		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆ それでもなお余る資金は借金の返済（市債の償還）に充てる ◆ 公共資産への投資と借入金の返済を業務活動収支の範囲内により行っているため、健全といえる
積極投資タイプ		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 経常的に発生する業務活動により獲得した資金を将来のために投資 ◆ かつ、借金（市債の発行）をしてその資金を投資に充てている ◆ 業務活動収支の範囲を超えて（将来負担のリスクをとって）積極的に公共投資を行っている
債務圧縮タイプ		<ul style="list-style-type: none"> ◆ 経常的に発生する業務活動により獲得した資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆ かつ、公共資産や出資を売却する等して得た資金を借金の返済（市債の償還）に充てている ◆ 債務が減少しているため、将来リスクは減少しているが、必要な投資を行う余裕がない

連結対象とした会計の範囲



◎財務書類分析の視点

総務省から示された以下の分析の視点を参考に分析を行いました。

【分析の視点】	【住民のニーズ】	【指 標】
資産形成度	将来世代に残る資産はどのくらいあるのか	<ul style="list-style-type: none"> ◆住民一人当たり資産額 ◆有形固定資産の行政目的別割合 ◆歳入額対資産比率 ◆有形固定資産減価償却率（資産老朽化比率）
世代間公平性	将来世代と現世代との負担の分担は適切か	<ul style="list-style-type: none"> ◆純資産比率 ◆社会資本等形成の世代間負担比率（将来世代負担比率） 【関係指標】 将来負担比率
持続可能性（健全性）	財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）	<ul style="list-style-type: none"> ◆住民一人当たり負債額 ◆基礎的財政収支 ◆債務償還可能年数 【関係指標】 健全化判断比率
効 率 性	行政サービスは効率的に提供されているか	<ul style="list-style-type: none"> ◆住民一人当たり行政コスト ◆性質別・行政目的別行政コスト
弾 力 性	資産形成を行う余裕はどのくらいあるか	<ul style="list-style-type: none"> ◆行政コスト対税収等比率 【関係指標】 経常収支比率 実質公債費比率
自 律 性	歳入はどのくらい税金等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）	<ul style="list-style-type: none"> ◆受益者負担の割合 【関係指標】 財政力指数

1 資産形成度 将来世代に残る資産はどのくらいあるのか

資産形成度は、「将来世代に残る資産はどのくらいあるのか」といった住民の関心に基づくものです。

資産に関する情報は、歳入歳出決算書に添付される「財産に関する調書」においても、公有財産、物品、債権、及び基金の種別により記載されています。しかし、土地及び建物並びに山林は、地積や面積で測定され、動産も個数で表示されるなど、市が保有する資産の価値に関する情報を得ることができません。

貸借対照表（BS）は、資産の部において市の保有する資産のストック情報を一覧表示しており、これを「市民一人当たり資産額」や「有形固定資産の行政目的別割合」、「歳入額対資産比率」、「有形固定資産減価償却率」といった指標を用いてさらに分析することで新たな情報を得ることができます。

市民1人当たり資産額		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
資産総額 住民基本台帳人口	一般	149.0万円	148.1万円	146.6万円	145.6万円	144.1万円
	全体	225.7万円	225.2万円	222.9万円	222.9万円	222.1万円
	連結	235.7万円	235.6万円	234.5万円	234.9万円	241.0万円

資産総額を住民基本台帳人口で除することにより、市民1人当たりの資産額を算出します。類似団体との比較に利用します。

平成29年から令和3年にかけて、一般、全体においてゆるやかな減少がみられます。これは、住民基本台帳人口が減少していますが、それを上回る割合で資産が減少していることを意味します。一般会計等における資産の減少要因としては、事業用資産の減少▲3,064百万円（H29：24,653百万円 → R3：21,589百万円）が挙げられます。令和3年度は、道路、市民体育館照明・空調設備、漆山小学校法面ユニットネット、ロータリ除雪車などが新たに資産として計上されたほか、旧ハイジアパーク南陽の売却による土地、建物の減少がありました。連結の令和3年度の資産の増額は、置賜広域行政事務組合の養護老人ホーム南陽やすらぎ荘などが新たに計上されたことによります。

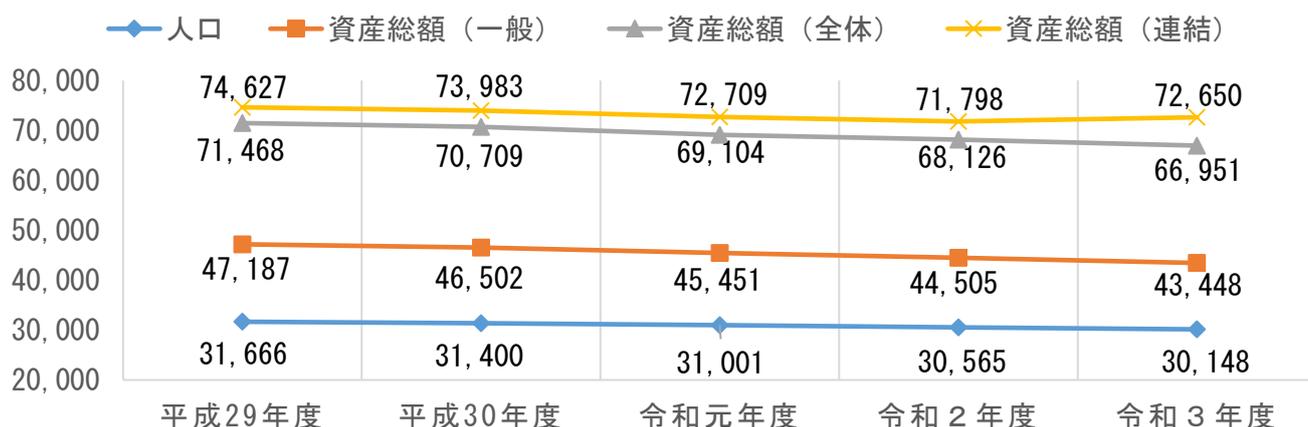
【資産総額】	H29	R3	H29～R3 増減額
一般	47,187百万円	43,448百万円	▲3,739百万円
全体	71,468百万円	66,951百万円	▲4,517百万円
連結	74,627百万円	72,650百万円	▲1,977百万円

【住民基本台帳人口】	平成29年	R3年	増減額
	31,666人	30,148人	(▲1,518人)

※一般的な値：100万円～300万円程度

【単位】
人口：人
資産総額：百万円

人口と資産総額の推移



歳入額対資産比率		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
資産総額	一般	3.2年	3.2年	3.0年	2.4年	2.3年
収入総額	全体	3.1年	3.2年	3.0年	2.6年	2.6年
	連結	3.0年	3.1年	2.9年	2.6年	2.6年

資金収支計算書の収入総額に対する資産総額の割合をいいます。これまでに形成された資産が収入の何年分に相当するかを表し、地方公共団体の資産形成の度合いを測ることができます。

平成29年から一般、全体、連結とも緩やかに減少しています。特に令和2年から大きく減少していますが、一時的な収入総額の増加によるものです。これは、一般会計等において新型コロナウイルス感染症対策事業を実施していることに伴い、業務収入のうち国県等補助金収入が大きく増加（令和元年比+20.8億円）したことによります。一般会計等においては、平成29年と比較すると資産総額は37億円の減、収入総額は39億円の増となっており、歳入額対資産比率は0.9ポイント減少しています。

南陽市は、一般的な団体の平均より低い数値となっています。この歳入額対資産比率が高ければ、社会資本の整備に重点を置いてきたことを表しますが、歳入規模に対して過度の社会資本整備を行っている場合などは、今後それらの維持のための負担が大きくなり、将来の財政運営を圧迫するおそれがあります。必ずしも高ければよいものではないことに留意する必要があります。

※一般的な値 : 3.0年~7.0年程度

有形固定資産減価償却率		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
償却資産の減価償却累計額 償却資産の取得価額等	一般	50.9%	52.1%	54.3%	56.2%	57.1%
	全体	44.5%	45.8%	47.8%	49.7%	50.7%
	連結	45.9%	47.3%	49.2%	50.4%	52.5%

有形固定資産のうち償却資産の取得価額等に対する減価償却累計額の割合をいいます。耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過しているのかを表し、資産の老朽化のおおよその度合いを測ることができます。

一般的に数値が高いほど資産の老朽化が進んでいるといえます。本市においては公共施設を長く維持・活用し、トータルコストを抑えていくため、施設の長寿命化に取り組んでいます。そのため、この数値は今後も上昇していくことが予想されます。

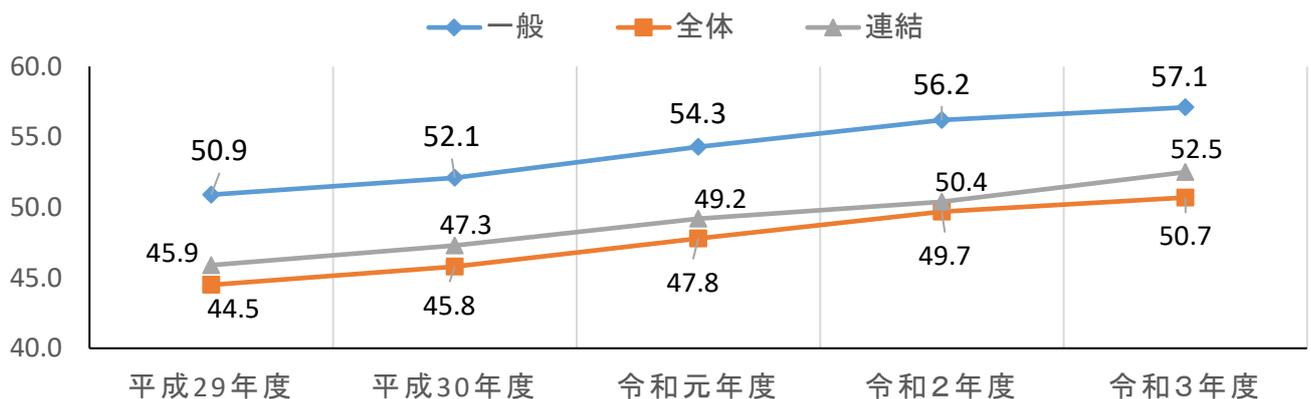
平成29年から令和3年にかけて、一般6.2%、全体6.2%、連結6.6%それぞれ増加しています。これは、新たに取得した資産の額に比較して減価償却額が大きいことを示しています。

本市の有形固定資産減価償却率は、他団体と比較して極端に高い数値を示しているわけではありません。しかしながら、市の保有する4割以上の公共施設が築30年を経過するなど、全体としては施設の老朽化が進んでいる状況にあります。

※一般的な値 : 35%~50%程度

有形固定資産減価償却率の推移

【単位 %】



2 世代間公平性 将来世代と現世代との負担の分担は適切か

世代間公平性は、「将来世代と現世代との負担の分担は適切か」といった住民の関心に基づくものです。これは、貸借対照表上の資産、負債及び純資産の対比によって明らかにされます。

世代間公平性を表す指標としては、地方財政健全化法における「将来負担比率」もありますが、貸借対照表により、財政運営の結果として、資産形成における将来世代と現世代までの負担のバランスが適切に保たれているのか、どのように推移しているのかを端的に把握することが可能となります。「純資産比率」や「社会資本等形成の世代間負担比率（将来世代負担比率）」が分析指標として挙げられます。

純資産比率		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
純資産総額 — 資産総額	一般	61.5%	61.2%	60.8%	60.4%	58.7%
	全体	49.3%	49.7%	50.1%	50.5%	49.6%
	連結	48.2%	48.7%	48.9%	49.3%	49.1%

資産総額のうち返済義務のない純資産がどれくらいの割合かを表します。
純資産の変動は、将来世代と現世代の間で負担の割合が変動したことを意味します。

企業会計でいう自己資本比率に相当し、この比率が高いほど財政状況が健全であるといえます。
平成29年から令和3年にかけて、一般は2.8%の減、全体は0.3%の増、連結は0.9%の増となっています。一般会計等において令和3年の数値が大きく減少しているのは、純資産総額の減少幅が比較的大きいため、理由としては、旧ハイジアパーク南陽の売却などにより「事業用資産等の減少」が大きかったことが挙げられます。

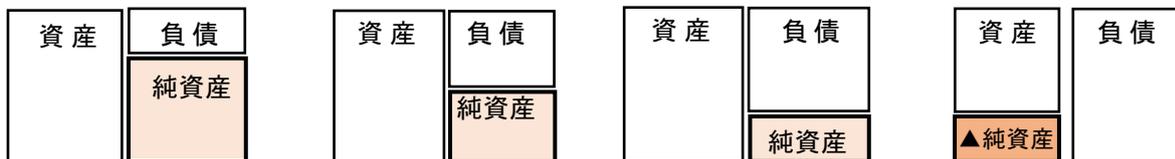
なお、純資産は次の式において表すことができます。 純資産 = 資産 - 負債

【資産総額】	【純資産総額】		
前述のとおり	H29	R3	H29～R3 増減額
一般	29,002百万円	25,505百万円	▲3,497百万円
全体	35,231百万円	33,202百万円	▲2,029百万円
連結	35,955百万円	35,669百万円	▲286百万円

純資産額の増加は、現世代が自らの負担によって将来世代も利用することができる資源を蓄積したことを表しています。反対に純資産の減少は、将来世代が利用することができた資源を現世代が消費して便益を受ける反面、将来世代に負担が先送りされたことを表します。

全体、連結の値が低いのは、水道事業及び下水道事業の仕組みが、将来の使用料収入で回収することを前提としていることや、地方債の償還年限が一般会計等よりも長いことが要因です。

※一般的な値 : 50%～90%程度



← 将来世代に資産を残している

→ 将来世代に負担を先送りしている

将来世代負担比率		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
地方債＋1年内償還予定地方債	一般	36.2%	36.5%	37.0%	37.2%	39.7%
有形固定資産＋無形固定資産	全体	39.8%	39.5%	39.2%	38.8%	39.7%
	連結	41.0%	40.5%	40.5%	40.0%	40.7%

社会資本等について地方債により形成した割合をいいます。数値が大きいほど社会資本等の形成に係る将来世代の負担の比重が大きくなります。

平成29年から令和3年にかけて、一般は3.5%増加しましたが、全体は0.1%、連結は0.3%それぞれ減少しています。これは、全体、連結会計において、長期的に見て、将来世代の負担が減少傾向にあることを表しています。数値が減少した主な要因は、地方債の減少です。

令和3年一般会計等においては、道路整備事業のほか、新たに養護老人ホーム南陽やすらぎ整備事業、新温浴施設整備事業、認定こども園つばめ幼稚園整備事業などで、新たに16.6億円の地方債を発行しています。

地方債の発行には後年度の財政負担を伴いますが、「歳入・歳出の年度間調整」や「世代間公平のための調整」といった調整機能が備わるため、適切に発行されれば安定的な行政サービスの提供に大きく役立つものとされています。これからも本市の現状を正確に把握し、適正な発行額となるよう努めていきます。

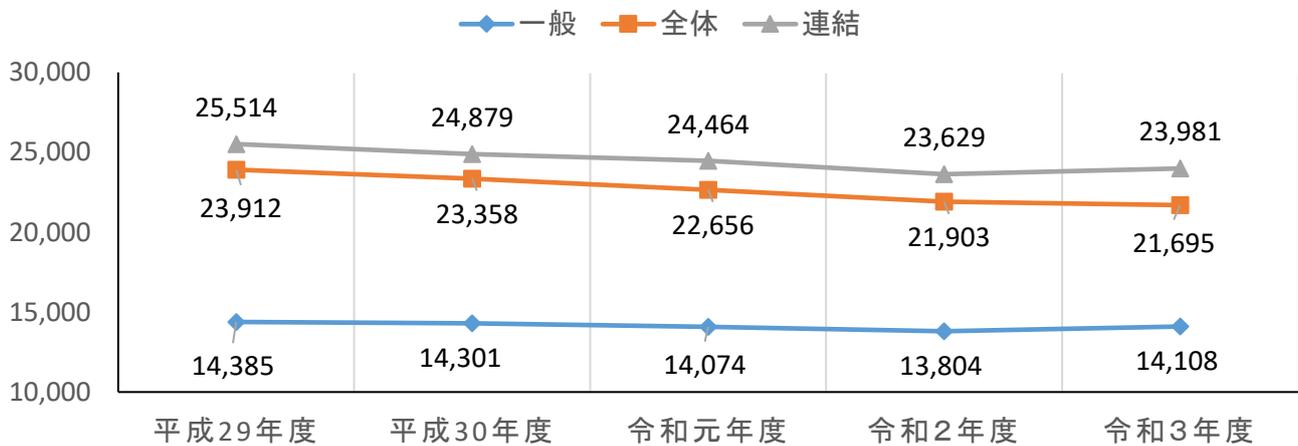
【地方債の額】

	H29	R3	H29～R3 増減額
一般	14,385百万円	14,108百万円	▲277百万円
全体	23,912百万円	21,695百万円	▲2,217百万円
連結	25,514百万円	23,981百万円	▲1,533百万円

※一般的な値 : 10%～40%程度

地方債の推移

【単位 百万円】



(注) 上のグラフは「1年内償還予定地方債」を除いた地方債の推移を表しています。

3 持続可能性（健全性）

財政に持続可能性があるか

持続可能性（健全性）は、「財政に持続可能性があるか（どのくらい借金があるか）」という住民の関心に基づくものであり、財政運営に関する本質的な視点といえます。これに対しては、第一に、地方財政健全化法の「健全化判断比率」（実質赤字比率、連結実質赤字比率、実質公債費比率及び将来負担比率）による分析が行われますが、これに加えて財務書類も有用な情報を提供することができます。

市の負債に関する情報については、現行の「予算に関する説明書」においても、債務負担行為額及び地方債現在高についてそれぞれ調書が添付されていますが、貸借対照表においては、このほかに退職手当引当金や未払金など、発生主義により全ての負債を捉えることが可能となります。

財政の持続可能性に関する指標としては、「市民一人当たり負債額」、「基礎的財政収支（プライマリーバランス）」、「債務償還可能年数」があります。

市民1人当たり負債額		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
負債総額 住民基本台帳人口	一般	57.4万円	57.5万円	57.5万円	57.6万円	59.5万円
	全体	114.4万円	113.3万円	111.2万円	110.4万円	111.9万円
	連結	122.1万円	120.8万円	120.0万円	119.0万円	122.7万円

人口1人当たりの負債総額をいいます。類似団体との比較に利用します。

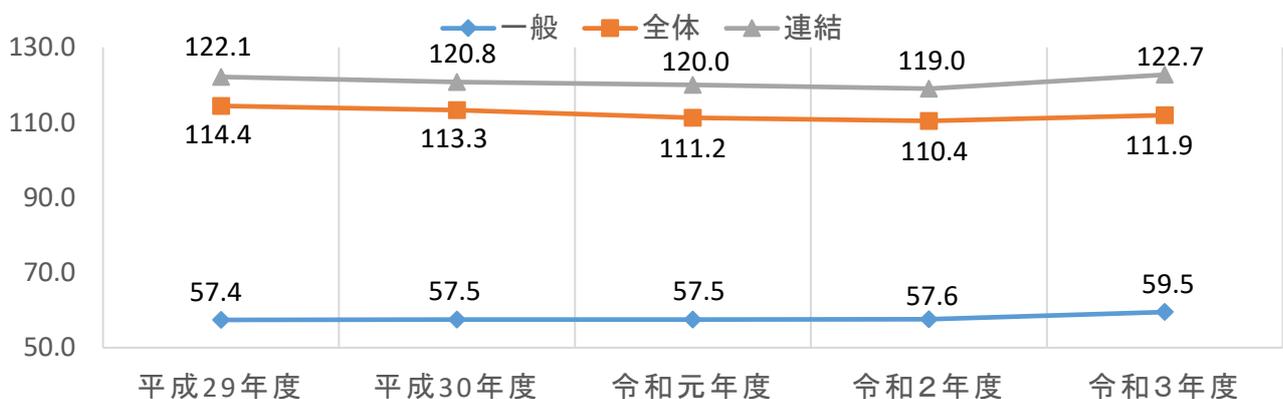
平成29年から令和3年にかけて、一般は2.1万円の増、全体は2.5万円の減、連結は0.6万円の増となっています。これは、一般会計等においては、負債のうち地方債（地方債と1年内償還予定地方債の合計額）が減少しているものの、それ以上に人口が減少したことによります。令和3年一般会計等においては、市債発行額16.6億円に対し、元金償還額12.9億円となっており、前年度と比較すると市債残高が3.7億円増加しています。（財務活動収支+3.8億円）

【地方債の額】 前述のとおり	【1年内償還予定地方債の額】			H29~R3増減額
	H29	R3		
一般	1,256百万円	1,357百万円		101百万円
全体	2,082百万円	2,163百万円		81百万円
連結	2,315百万円	2,434百万円		119百万円

※一般的な値 : 30万円~100万円程度

市民1人当たり負債額の推移

【単位 万円】



基礎的財政収支 (プライマリーバランス)		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
一般		7.5億円	2.6億円	2.1億円	2.6億円	0.9億円
業務活動収支－支払利息支出(▲)	全体	15.8億円	10.7億円	5.5億円	9.7億円	7.5億円
＋投資活動収支	連結	18.3億円	10.3億円	5.2億円	11.6億円	9.0億円

支払利息支出を除く業務活動収支及び投資活動収支の合計額をいいます。
地方債等の元利償還額を除いた歳出と地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを表します。

各年度ともにプラスの数値を確保しており、公債費に依存しない財政運営が行われたことを示しています。

この数値が均衡（0に近い。）している場合には、経済成長率が長期金利を下回らない限り経済規模に対する地方債の比率は増加せず、持続可能な財政運営であるといえます。反対にこの数値が大きくマイナスになると、その年の経費が市債に依存しないと賸えなかったことを意味し、そのままの財政運営を継続していくことは困難になります。

債務償還可能年数		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
地方債＋1年内償還予定地方債	一般	14.5年	19.9年	22.6年	22.8年	14.8年
業務収入－業務支出	全体	12.0年	13.6年	17.5年	13.8年	11.3年
	連結	11.1年	13.3年	16.6年	13.3年	9.7年

業務活動収支（臨時収支を除く。）に対する地方債残高の割合をいいます。
地方債の償還に要する年数を表し、年数が短いほど債務償還能力があるといえます。

平成29年から一般、全体、連結ともそれぞれ増加したものの、令和3年には減少に転じています。令和3年一般会計等においては、令和2年と比較し8.0ポイント数値が減少していますが、これは分母である「業務活動収支」が2.3億円（6.6億円→8.9億円）増加したことによります。業務支出のうち、数値が減少した項目は以下の項目です。

物件費等支出 : ▲366百万円（3,847百万円→3,481百万円）

補助金等支出 : ▲1,759百万円（5,374百万円→3,615百万円）

令和2年及び令和3年は、新型コロナウイルス感染症対策事業により、各支出項目とも金額が大きく変動しています。

債務償還可能年数は、償還財源上限額を全て債務の償還に充当した場合に、何年で現在の債務を償還できるかを表す理論値です。債務の償還原資を経常的な業務活動からどれだけ確保できているかということは、債務償還能力を把握する上で重要な視点のひとつといえます。

※一般的な値 : 3年～9年程度

(注) 「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい においては、債務償還可能年数の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。

本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】 (将来負担額－充当可能基金残高) ÷ (業務収入等－業務支出)

4 効率性 行政サービスは効率的に提供されているか

効率性は、「行政サービスは効率的に提供されているか」という住民の関心に基づくものです。地方自治法においても、第2条第14項において「地方公共団体は、その事務を処理するに当たっては、住民の福祉の増進に努めるとともに、最小の経費で最大の効果を挙げるようにしなければならない」とされています。財政の持続可能性と並んで住民の関心が高い視点といえます。

行政の効率性を表す「行政コスト計算書」は、市の行政活動に係る人件費や物件費等の費用を発生主義に基づきフルコストとして表示するものであり、行政の効率化を目指す際に不可欠な情報を一括して提供するものとなっています。

行政コスト計算書においては、「住民一人当たり行政コスト」を用いることにより、効率性の度合いを定量的に測定することが可能となります。

住民1人当たり行政コスト	平成29年 平成30年 令和元年 令和2年 令和3年														
	一般	全体	連結	一般	全体	連結									
純行政コスト 住民基本台帳人口	41.1万円	61.9万円	62.6万円	39.6万円	58.1万円	58.1万円	43.4万円	62.4万円	62.7万円	56.9万円	75.3万円	75.2万円	55.9万円	75.3万円	75.4万円

住民1人当たりの行政コストをいいます。類似団体との比較に利用することで、地方公共団体の行政活動の効率性を比較することができます。

平成29年から令和3年にかけて、一般は14.8万円、全体は13.4万円、連結は12.8万円増加しています。これは、純行政コストの増加と住民基本台帳人口の減少によるものです。純行政コストが増加した主な理由は、経常費用のうち「移転費用」の項目に含まれる「補助金等」と「社会保障給付」が大きく増加したことによります。

【純行政コストの額】

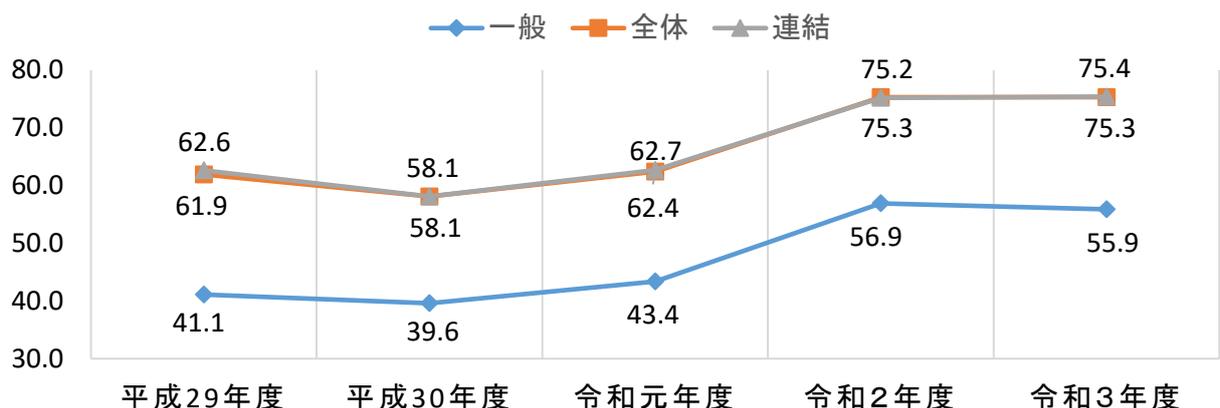
	H29	R3	H29~R3 増減額
一般	13,002百万円	16,848百万円	3,846百万円
全体	19,602百万円	22,690百万円	3,088百万円
連結	19,817百万円	22,721百万円	2,904百万円

令和2年以降、数値が大きく上昇していますが、これは一般会計等において、新型コロナウイルス感染症対策事業を実施したためです。令和3年度は、全市民応援クーポン事業をはじめとする「緊急経済対策事業」、「子育て世帯への臨時特別給付金給付事業」、「住民税非課税世帯等臨時特別給付金給付事業」などを実施しました。

※ 住民1人当たり行政コストについては、地方公共団体の人口や面積、行政権能等により異なります。一概に他団体との比較を行うことは適切ではないため、比較する際には類似団体で行うこととされています。

住民1人当たり行政コストの推移

【単位 万円】



5 弾力性 資産形成を行う余裕はどのくらいあるか

弾力性は「資産形成等を行う余裕はどのくらいあるか」といった住民の関心に基づくものです。

財政の弾力性については、一般に、「経常収支比率」等が用いられますが、財務書類においても弾力性の分析が可能となっています。「純資産変動計算書」において、市の資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているか「行政コスト対税収等比率」を示すことができます。

これは、市がインフラ資産の形成や施設の建設といった資産形成を行う財源的余裕度がどれだけあるかを示しています。

行政コスト対税収等比率						
		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
純経常行政コスト 財源	一般	103.2%	104.9%	106.7%	104.1%	99.6%
	全体	100.7%	100.6%	102.5%	100.8%	98.7%
	連結	100.7%	100.1%	101.9%	100.4%	96.8%

資産形成を伴わない行政活動に係る行政コストに対して地方税、地方交付税等の当該年度の一般財源等がどれだけ充当されているかを示します。

平成29年から令和3年にかけて、一般3.6%、全体2.0%、連結3.9%それぞれ減少しています。令和3年一般会計等においては、令和2年と比較すると純経常行政コストは20.3億円の減、財源は12.9億円の減となっており、数値は4.5ポイント減少しています。この比率が100%に近づくほど資産形成の余裕度が低いといえ、さらに100%を上回ると、過去に蓄積した資産（基金など）が取り崩されたことを表します。

基金取崩収入(令和3年一般会計等) : 1,087百万円

基金積立金支出(令和3年一般会計等) : 1,193百万円

【純経常行政コストの額】

	H29	R3	H29~R3 増減額
一般	13,060百万円	15,373百万円	2,313百万円
全体	19,483百万円	21,203百万円	1,720百万円
連結	19,716百万円	21,243百万円	1,527百万円

【財源の額】

	H29	R3	H29~R3 増減額
一般	12,652百万円	15,432百万円	2,780百万円
全体	19,346百万円	21,478百万円	2,132百万円
連結	19,585百万円	21,943百万円	2,358百万円

※平均的な値 : 90%~110%程度

6 自律性 行政コストに対する受益者の負担はどのくらいあるか

自立性は「歳入はどのくらい税収等で賄われているか（受益者負担の水準はどうなっているか）」といった住民の関心に基づいています。

これは市の財政構造の自律性に関するものであり、決算統計における「歳入内訳」や「財政力指数」が関連しますが、財務書類についても、「行政コスト計算書」において使用料・手数料などの受益者負担の割合を算出することが可能であるため、これを受益者負担水準の適正さの判断指標として用いることができます。

受益者負担の割合		平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	令和3年
経常収益 ―― 経常費用	一般	2.7%	3.0%	2.5%	1.7%	2.4%
	全体	7.1%	7.9%	7.7%	6.3%	6.8%
	連結	11.4%	11.7%	12.1%	10.0%	11.1%

経常費用に対する使用料及び手数料を主とする経常収益の割合をいいます。
受益者が負担しない部分については、税、地方交付税及び補助金等により賄われます。

平成29年から令和3年にかけて、一般、全体、連結とも減少しています。令和2年で大きく数値が減少しているのは、一般会計等において前述の新型コロナウイルス感染症対策事業を実施したため経常費用が3,931百万円増（R元：13,779百万円 → R2：17,710百万円）となったことによります。令和3年は反対に経常費用が1,960百万円減（R3：15,750百万円）となったことにより、数値が上昇に転じています。

一般的に病院、ガス、上下水道事業を行う地方公共団体は、受益者負担比率の数値が高くなる傾向があります。

【経常収益の額】

	H29	H30	R元	R2	R3
一般	357百万円	382百万円	342百万円	304百万円	377百万円
全体	1,479百万円	1,551百万円	1,593百万円	1,544百万円	1,553百万円
連結	2,547百万円	2,413百万円	2,651百万円	2,553百万円	2,650百万円

【経常費用の額】

	H29	H30	R元	R2	R3
一般	13,417百万円	12,795百万円	13,779百万円	17,710百万円	15,750百万円
全体	20,962百万円	19,759百万円	20,831百万円	24,568百万円	22,756百万円
連結	22,262百万円	20,636百万円	22,001百万円	25,532百万円	23,892百万円

※平均的な値：2%～8%程度

(注) 「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」落合幸隆著（株）ぎょうせい においては、受益者負担の割合の計算式を以下のとおり示していますが、他市では上記の計算式を採用しています。

本報告においては、他市との比較を容易にするため上記の計算式で分析を行いました。

【計算式】 使用料及び手数料 ÷ 純経常行政コスト

【参考資料】 「自治体担当者のための公会計の統一的な基準による財務書類の作成実務」
落合幸隆著 （株）ぎょうせい

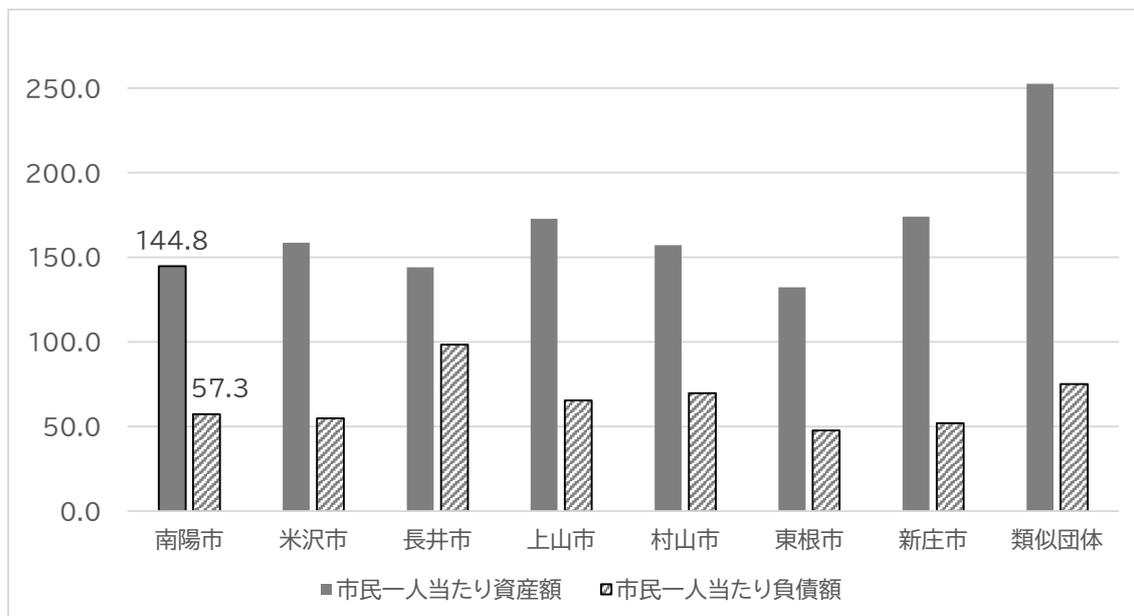
【参考資料】

主要指標の県内自治体との比較（令和2年度決算：一般会計等）

南陽市の現状について県内の近隣及び同規模自治体と比較してみました。

（総務省：令和2年度 統一的な基準による財務書類に関する情報より） ※比較可能な最新値

◆市民一人当たりの資産と負債



(単位:万円)

	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
市民一人当たり資産額	144.8	158.6	144.2	172.8	157.2	132.3	174.1	252.6
市民一人当たり負債額	57.3	54.8	98.4	65.5	69.7	47.6	51.9	75.1

人口	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市
	30,740	78,965	26,159	29,564	23,191	47,808	34,787

人口は令和3年1月1日現在

過去に取得した建物等の事業用資産の減価償却が進み、資産は減少傾向にあります。

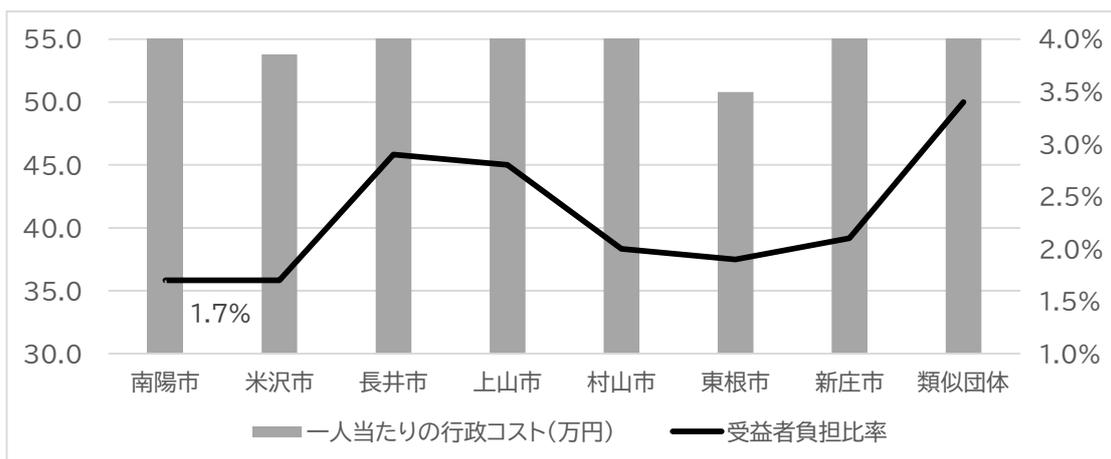
負債については、地方債残高が減少していますが人口減少の影響もあり横ばいとなっています。

人口規模が小さい自治体ほど、人口増減の影響が数値に大きく反映されます。

*類似団体

=人口、産業構造の組み合わせで分類し、そのなかで標準的な運営をしている自治体の平均値をとったもの。

◆行政コストと受益者負担率

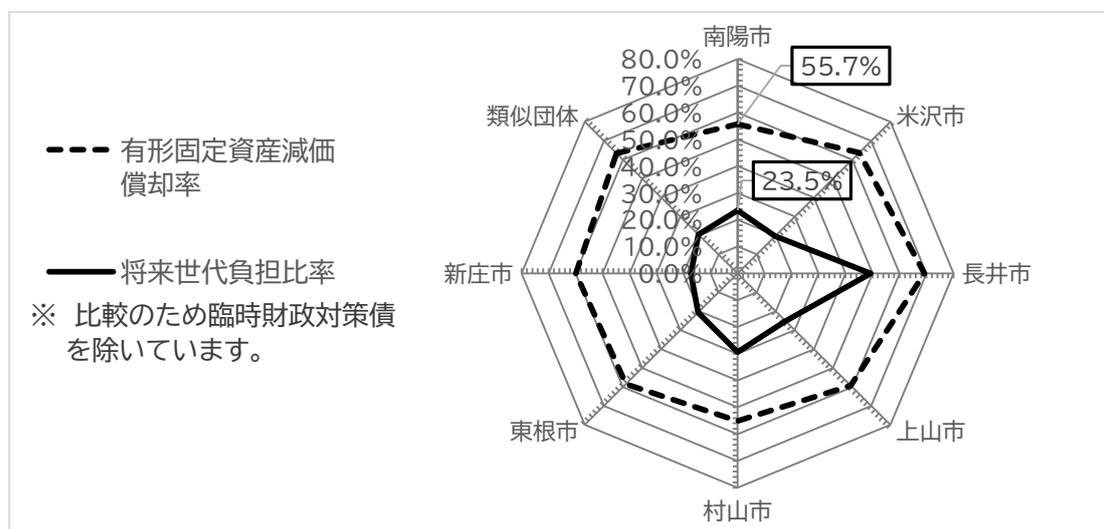


	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
一人当たりの行政コスト(万円)	56.6	53.8	64.6	55.2	61.9	50.8	57.8	66.3
受益者負担比率	1.7%	1.7%	2.9%	2.8%	2.0%	1.9%	2.1%	3.4%

南陽市の一人当たりの行政コスト、受益者負担率は、他と比較してもコストは高めで、負担は低い傾向にあります。

なお、令和2年度は新型コロナウイルス感染症にかかる各種給付事業などがあり行政コストは大きく増加し、受益者負担比率はコロナ交付金など国庫財源により減少しています。

◆施設の老朽化率と将来世代への負担



	南陽市	米沢市	長井市	上山市	村山市	東根市	新庄市	類似団体
有形固定資産減価償却率	55.7%	63.7%	69.2%	59.3%	55.1%	58.5%	59.9%	63.4%
将来世代負担比率	23.5%	19.7%	49.3%	25.1%	29.4%	20.7%	17.3%	20.5%

有形固定資産減価償却率(老朽化率)は平成26年に文化会館を整備したため他と比較しても高くはありません。(本市規模の場合、大規模な建設事業があれば数値に大きく影響します。)

将来負担比率についても補助事業や交付税措置のある有利な地方債の活用により将来世代の大きな負担とはなっていません。